

第2回優秀会社史賞選考報告書

1980年6月6日

優秀会社史賞選考委員会

優秀会社史賞選考委員会

(50音順)

委員長	東京大学教授	中川敬一郎
委員	法政大学教授	伊牟田敏充
	三井銀行調査部長	後藤新一
	日本経済新聞社 編集総務	阪口昭
	法政大学教授	下川浩一
	東北大学助教授	大東英祐
	経団連図書館部長	長崎男幸
	早稲田大学教授	間宏
	東京大学教授	山崎広明
	明治大学教授	由井常彦
	一橋大学教授	米川伸一

事務局：財団法人 日本経営史研究所

第2回優秀会社史賞入賞作品

(50音順)

優 秀 会 社 史 賞

鹿児島銀行百年史

グンゼ株式会社八十年史

日揮五十年史

創業百年史 広島銀行

特 別 賞

新井清太郎商店九十年史

カゴメ八十年史

第2回優秀会社史賞候補作品

(50音順)

優秀会社史賞 候補作品

鹿児島銀行百年史
グンゼ株式会社八十年史
十六銀行百年史
住友銀行八十年史
大日本製薬八十年史
東販三十年史 東京出版販売
中ノ郷信用組合五十年史
西日本鉄道70年史
二十年の歩み 日貿信
日揮五十年史
四十年史 日鉄鉱業
日本合成ゴム二十年史
日本甜菜製糖60年史
日野自動車販売30年史
創業百年史 広島銀行
不二越五十年史
松江相互銀行史
明治ゴム化成八十年史

特別賞 候補作品

朝日新聞販売百年史

新井清太郎商店九十年史

大阪魚市場株式会社三十年史

太田胃散百年の回想

カゴメ八十年史

資生堂宣伝史Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ

社史Ⅰ 新明和工業

東京海上の100年

東京帽子八十五年史

大衆とともに25年 日本テレビ

日本リース十五年史

マンダム五十年史

目 次

第2回優秀会社史賞入賞作品	1
第2回優秀会社史賞候補作品	2
第2回優秀会社史賞選考報告	6
I. 入賞作品選評	15
〔優秀会社史賞〕	
鹿児島銀行百年史	16
グンゼ株式会社八十年史	18
日揮五十年史	20
創業百年史(広島銀行)	22
〔特別賞〕	
新井清太郎商店九十年史	24
カゴメ八十年史	26
II. 候補作品選評	29
〔優秀会社史賞候補〕	
十六銀行百年史	30
住友銀行八十年史	32
大日本製薬八十年史	34
東販三十年史	36
中ノ郷信用組合五十年史	38
西日本鉄道70年史	40
二十年の歩み(日貿信)	42
四十年史(日鉄鉱業)	44
日本合成ゴム株式会社二十年史	46
日本甜菜製糖60年史	48

日野自動車販売株式会社30年史	50
不二越五十年史	52
松江相互銀行史	54
明治ゴム化成八十年史	56
〔特別賞候補〕	
朝日新聞販売百年史	58
大阪魚市場株式会社三十年史	60
太田胃散百年の回想	62
資生堂宣伝史Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ	64
社史Ⅰ 新明和工業株式会社	66
東京海上の100年史	68
東京帽子八十五年史	70
大衆とともに25年〈沿革史〉（日本テレビ）	72
日本リース十五年史	74
マングラム五十年史	76

第2回優秀会社史賞選考報告

— 選考の経過ならびに総評 —

1. 選考の経過

i) 選考の対象

第2回優秀会社史賞の選考対象とする会社史は、昭和53、54両年度に刊行されたもののうち、日本経営史研究所が専門図書館協議会の作成した「社史・経済団体史総合目録」によって収集しえた166冊とした。ただし、53年1月から同年3月までに刊行されたものであっても、前回の選考の際に入手できず選考の対象にできなかったものも取り上げた。

ii) 選考の手順

発行点数が多く、これをすべて最初から選考委員会の選考に委ねることは無理であるため、委員会にがける冊数を最大30冊とすることを目標にして、経営史研究所において第1次選考を行なうこととした。

まず、本賞は会社史刊行の主体である企業が受賞の主体になるという建前のゆえに、出版社が独自の企画で刊行したものは選考の対象から除いた。また、ほとんど写真集といってよいようなものや、最少限の年表はあるが企業の歴史の記述が著しく少ないものは除外した。さらに、政府系企業についても、その経営方針が政府の政策に大きく左右される点からみて、民間企業の社史と同列に扱うことは不相当だという前回の社史賞の選考方針を踏襲し、これを除外した。

こうした手続きののちに残った97冊にさらに検討を加え、「候補作品」と

すべきものを委員会に提出し承認を得ることとした。

なお、今回は、経営史学会関係者を中心として85名の方々に「お読みになった社史の中から好ましいと考えられたものを推選してください」とのアンケートを行なったところ、22名の方から回答をいただいた。このうち16名の方が書名をあげてくださったので、参考にさせていただいた。

iii) 第1次選考

100点近くの対象作品を短時日のうちにふるい分け、本選考に回わず候補作20～30点を選び出す第1次選考では、内容にまで深く立入った検討は不可能であり、課された役割からも、それは避けなければならなかった。そこでチェックすべきポイントをほぼつぎのように合意し、さらに選外とした作品のなかで心残りのものについては、選考委員の判断を仰ぐ意味で注目作品として報告することとした。

まず、オーソドックスな社史——自社の経営活動を全般にわたって叙述してあるもの——を対象とする優秀会社史賞候補の場合は、主として目次とあとがき、および資料（本文中と付属資料）を判定材料に、以下の点をチェックした。

①構成および記載事項において、経営の足跡が全般的かつ統一的に、また歴史的に理解できる構成になっているかどうか、政府、業界、地域経済など経営諸環境との関連、また関係した社会的事件について記述されているか、その企業としての特色を出す叙述上の工夫がなされているか。

②資料の利用と収録について、論述に資料に基づく実証努力がうかがわれるか、巻末の統計資料——生産・販売統計、財務諸表、従業員推移等——が、経営の実態を知るに必要な基礎的データを整備しているか、さらに年表や索引など利用上の便宜への配慮が払われているか。

以上の点をチェックするとともに、本格的な社史であるためには、ある程度の詳しさは求められるものとした。同時に、既刊の社史を持つ社史に対しては、その水準をこえる努力、新しい工夫が施されているかを、編纂意図、目次構成

から見ることにした。

つぎに特別賞候補の場合には、社史として、経営史としての性格を前提とした上で、社史企画の独創性を評価するのが目的であるから、以下の点で優れているものは、本選考へ推薦することにした。

- ①ハンディでリーダブルなもの、読ませる工夫がしてあるもの。
- ②創業者や歴代経営者の伝記的要素と会社の歴史とが巧みに織り合わせてあるもの。
- ③興味ある資料収録や見る楽しさなど、企画面にユニークさがうかがわれるもの。
- ④経営全般にはわたらないが、特定部門の歴史を扱って優れているもの。
- ⑤新しい産業、特殊な業種について、読者の理解に役立つもの。

以上の諸点を一応の基準としつつ、第1次選考担当者の中で検討を重ねた結果、まず、つぎの28点を「候補作品」として選考委員会に提出することとした。

優秀会社史賞候補；『鹿児島銀行百年史』；『グンゼ株式会社八十年史』，『十六銀行百年史』，『住友銀行八十年史』，『大日本製薬八十年史』，『東京海上火災保険株式会社百年史（上）』，『東販三十年史』，『中ノ郷信用組合五十年史』，『西日本鉄道七十年史』，『二十年の歩み』（日貿信），『日揮五十年史』，『四十年史』（日鉄鉱業），『日本合成ゴム二十年史』，『日本甜菜製糖60年史』，『創業百年史』（広島銀行），『明治ゴム化成八十年史』，以上16点。

特別賞候補；『朝日新聞販売百年史』，『新井清太郎商店九十年史』，『大阪魚市場株式会社三十年史』，『太田胃散百年の回想』，『カゴメ八十年史』，『資生堂宣伝史Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ』，『社史Ⅰ 新明和工業』，『東京海上の100年』，『東京帽子八十五年史』，『大衆とともに25年』（日本テレビ），『日本リース十五年史』，『マンダム五十年史』，以上12点。計28点。
このほかにも、とくに規模の大きくない企業やまだ歴史の浅い企業において；

意欲的に社史編纂に取り組んでいる例が多くあった反面、前回の選考委員会で、批判あるいは疑義の対象となった形式的な時代区分（編年別構成など）や安易な機能別編成（営業・技術・労務など）のものが少なくなった一方で、総論と事業分野別各論という構成をとったものが増えた。近年、多角化の著しいメーカーなどの場合、各事業部門を個別に詳述するケースが増えてきている現実から、これをやむをえないとする意見が出た。また、資料記録的性格を意図したものについても、評価を求めたいとする意見があった。そこで、1次選考段階で意見の分かれたものとともに、これらに該当するものも、注目作品として提出し、本選考の対象とするか否かは選考委員の判断に委ねることとした。

注目作品：『協栄生命史稿〔Ⅱ〕』、『クミカ30年史』（クミアイ化学）、『東燃タンカー二十年史』、『日本製鋼所社史資料（続巻）』、『日本電気最近十年史』、『日野自動車販売株式会社30年史』、『不二越五十年史』、『ライオン油脂六十年史』

iv) 候補作品の決定

前記、優秀会社史賞候補作品16点、特別賞候補作品12点を選考委員会に提出したが、委員会では、

①『東京海上火災保険株式会社百年史(上)』については、同社史の企画は上巻と下巻が一体になった企画であるから、下巻の刊行を待って評価することとし、今回の対象にはしない。

②上記を除いた候補作品を承認したうえで、さらに、相互銀行史も1冊とりあげる必要がある。

以上の意見が出されて『松江相互銀行史』が、注目社史として補足したものの中から『日野自動車販売30年史』ならびに『不二越五十年史』が候補作品として追加された。この結果、優秀会社史賞候補作品は18点となり、つごう30点が検討されることになった。

V) 入賞作品の決定

30点の候補作品は複数の委員によって精読され、全委員の討議によって次の入賞作品を決定した。(50音順)

優秀会社史賞

『鹿児島銀行百年史』

『グンゼ株式会社八十年史』

『日揮五十年史』

『創業百年史』(広島銀行)

特別賞

『新井清太郎商店九十年史』

『カゴメ八十年史』

なお、米川委員は外国留学中につき今回は欠席されました。

2. 総 評

今回は選考の対象となった社史の点数が少なかったにもかかわらず、全体としてみれば本格的に取り組まれた社史が多かったといえよう。たんに企業の内部資料にとどまらず、外部からも積極的に資料を収集して自社の歴史を実証的に裏付ける努力をし、さらにこれらを駆使して企業の発展過程を克明に記録し、また、その歴史的役割を位置付ける試みのなされている社史も少なくない。この点では、社史にたいする認識が一層高まったものといってよい。前回より、やや改善されたと思われるのは、編別構成であろう。会社の諸機能にしたがって安易に編別構成をしたものはほとんどなく、部門編がつくられていても多くは事業部門によって編を構成し、さらに本史編との均衡を保つ工夫のなされているものも、いくつかみられた。また形式的な時代区分、たとえば明治時

代、大正時代といったものも、だいぶ少なくなってきた。それぞれの企業の活動には時代による浮沈があり、その歴史を記述するには、こうしたダイナミズムを十分にとらえ、どの時点、どの分野に、その企業にとって最もクリティカルな問題があるかを摘出しなければならない。機能別編別構成や、形式的時代区分は、こうした点で社史の記述を平板なものにしがちであり、その結果「歴史に学ぶ」という形で企業の将来への展望をもたらすものとはなりえないのである。

また、前回の指摘と同様の欠陥も、多くの社史にみられた。それは、第2次大戦後、時代を下るにつれて、経営史的な分析も不十分であり、叙述も平板になるという点である。歴史的な評価も定まらず、関係者も多い時代について分析的な記述をすることには、いろいろ困難な事情も多いのであろう。その他、原資料はたとえ社内資料であっても必ず明記すること、巻末索引をつけること（今回の候補作のうちで『二十年の歩み』（日貿信）と『明治ゴム化成八十年史』に索引があり、『資生堂宣伝史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』には人名索引のみ付されている。）、財務諸表その他経営の基礎的數字は一貫性をもたせることなど、改善すべき点は多い。

ところで、今回特別に記しておかなければならないのは、『稿本三井物産株式会社百年史』（昭和53年7月、上下2冊、各806ページ、539ページ）についてである。本社史は、学界の専門研究者を多数動員し、社内・社外の資料を豊富に使って、三井物産が日本の経済的發展に果たした大きな役割を実証的に分析した完成度の高いものである。しかし、対中国関係で本書の出版はみあわされ、稿本にとどまらざるを得なかったことが序文に記されている。三井物産では、戦前期にも『稿本三井物産沿革史』を編んだが、公刊されなかった。そのために、三井物産の研究は大きく遅れており、その意味から本書の公刊はぜひ望みたいところである。

1) 優秀会社史賞

『創業百年史』（広島銀行）；地方銀行の社史は一般的に水準が高いが、本書はなかでも最も優れたものといえる。原爆で資料が失われているにもかかわらず、よく資料を集め、自行の歴史を客観的に分析し、さらに広島県金融史の実証的研究としても高い水準に到達している。広島県下で営業したすべての銀行について基本的な資料を網羅している点も高く評価された。

『鹿児島銀行百年史』；本書も各種資料を駆使して実証的分析を行っており、最近の地方金融史研究の成果もとり入れて重厚な内容となっている。しかし、鹿児島県の産業を記述しながら、それと同行との関係が必ずしも明らかになっていないきらいがあった。資料や記述の出典なども十分に配慮されており、いねいにつくられた印象が好ましい。

『グンゼ株式会社八十年史』；経営史的視角が強調され、それに成功しているという点で非常に優れた社史である。経営判断の誤りまでも卒直な記述で語られている点は、とくに評価に値しよう。実証的にも以前に同社が刊行した社史をはるかに超えている。

『日揮五十年史』；本書は前三者にくらべるとやや議論があった。それは、本史の記述に経営的観点やや希薄であり、とくにファイナンスについてはまったく記述がなされていないという欠点を含むためである。しかし、全体としてバランスよくまとまっているし、同業他社の社史にくらべると、記述もいねいであること、技術史として有効であることから選に入れた。

このほかには『西日本鉄道七十年史』、『日野自動車販売30年史』などが議論の的となったが、『西日本鉄道七十年史』は全体に記述が表面的・羅列的で、しかも貸借対照表を欠いているという致命的欠陥がある。また『日野自動車販売30年史』は、日野自工あつてのマーケティング会社であるにもかかわらず、日野自工との関係が明快に描かれていないこと、単なるマーケティング史としてもあまり成功していないこと、財務諸表が簡略にすぎることなどが指摘された。

ii) 特 別 賞

『新井清太郎商店九十年史』；読んで面白く、記述が丹念であるという点で圧倒的な人気であった。資料収集にも苦心のあとがみられ、年表を付すなど編集方針もていねいであるが、営業報告書から判明する限りの決算数値、取引額その他の収録を望みたい。

『カゴメ八十年史』；常に高い水準の広報活動をしている同社の面目躍如とした社史である。食生活の文化史、農産物加工食品の流通史・技術史といった業界史的側面と、創業者の企業者精神とそれを受け継いだ同社の企業活動という個別経営史の側面とがみごとに織り合わされて、叙述を生き生きとさせている。

このほかに、『朝日新聞販売百年史』、『資生堂宣伝史』、『東京海上の100年』、『太田胃散百年の回想』が議論の対象となった。前二者は部門史であり、これを本賞の対象とすべきか否かで議論が分かれたが、経営全体像を伝えない部門史ははずしたほうがよいということで、これらは選外とされた。『東京海上の100年』については、読み物としては非常に面白く、損害保険という地味な仕事を一般に理解してもらおうという啓蒙的な役割は十二分に果しているが、経済史的視点が弱いこと、読み物としての性格が濃厚で、この点ではむしろノンフィクションものに近く、社史としては不完全であることなどの理由で、選外となった。『太田胃散百年の回想』も、創業者の苦心談は面白いが、社史、個別企業の経営史という点では、あまりにも資料が少ないということで選外とされた。



I. 入 賞 作 品 選 評

〔 優 秀 会 社 史 賞 〕

〔 特 別 賞 〕

注) 一の社史につき、お二人の委員の方々から選評をいただきました。

『鹿児島銀行百年史』

鹿児島銀行行史編纂室編

選評 I

地方銀行の行史は、近年にいたりますます大部のものとなり、史料もよく発掘されて、他の業種の社史よりも経営史学的視点からみた水準の高いものが一般的となってきた。本行史も、そのような地方銀行社史の傾向に沿うもので、B5判約1150ページの大冊であり、製本も典雅である。

行内の原史料のほか、各所の史料を使用し、最近の地方金融史研究の成果もとりいれ、重厚な内容となっているが、①事業における失敗（たとえば明治23年の倉庫銀行事件）についても詳細に叙述しており、②計画されたが実現しなかった諸問題（たとえば、明治20年頃の北海道支店設置計画、明治28年の台湾支店設置計画、明治29年の第五銀行との合併計画など）にも触れ、③県内他行の動向（たとえば店舗設置状況）などとの比較で経営戦略が述べられ、④重要事件（たとえば沖縄戦下の沖縄支店の状況）や制度・政策については原史料の引用によるヴィヴィッドな記述とし、⑤引用史料・図書・論文は出所を注記するなど、学術的批判に耐えうる内容・形式をとっている。支店史・合併銀行小史・財務諸表などの付属資料部分も充実しており、鹿児島市内の銀行店舗地図や県内銀行索引など、新しい工夫もみられ、既刊の地方銀行行史と比較すればそうとうに優れた内容といえることができよう。

できれば、行史に使用した行内の史料を整備し、史料集も刊行するなり、史料室を設けて、研究者が利用しうるように公開して頂きたい。

19×26cm, 1155ページ, 付属資料255ページ(年表36ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和55年2月刊

選評Ⅱ

本書は創業前史の国立銀行の評価, および同行設立と第五国立銀行の関係が詳しく分析されている。

鹿児島県の産業発展について, かなり細かい記述がなされているが, 鹿児島県の産業と同行との関係が具体的にあきらかにされていない面がある。

県内金融は比較的よくまとめられている。

同行自体の経営内容に関する記述は, 基本的計表はほぼ全部表に整理されている。

県内銀行の合同推移については, かなり詳細に分析されている。

明治23年の倉庫銀行事件とその善後措置は同行にとって不祥事件であるが, 本書はかなりのページ数をさいていることは評価に値しよう。

読み終えて, 強く印象に残ったのは「沖縄戦と沖縄支店」で, 凄惨な沖縄戦下での決死の営業が生々しく描かれている。

最近地方銀行の100年史が相次いで刊行されているが, 資料による実証性, 付属資料の豊富さ等において, 本書は劣るものではない。

『グンゼ株式会社八十年史』

グンゼ株式会社社史編纂室編

選評 I

日清戦争直後から今日まで、日本の製糸業、繊維産業の発展の一翼を代表してきた企業の発展史を見事に追跡した優れた社史である。論述の基調は十分抑制された客観的なものであり、郡是発展の各時点における重要な経営行動の意図、その成果も周到な検討のうえで詳述されている。特に、経営的視角に限界があり、決意した企業行動が、長期的にはともかく短期的には思わざる結果を招いた場合、逆に短期的には成果をあげながら長期的には問題を残した場合などについて、素直な疑問、反省、批判を加味しながら論述されている点は高く評価されなければならない。

また本社史では、資料をもって語らせる手法が意識的に採用されており、全編にわたって盛んに挿入されている引用文が郡是の経営史像を精彩あるものにしてている。さらに、創業者のキリスト教信仰の伝統にもとづき、郡是が力を注いだ従業員教育について詳述されている部分は、この企業の発展力の源泉を明らかにすると同時に、日本経営史のユニークな一側面についての貴重な資料を提供するものと言ってよいであろう。しかも、そうした教育制度の成果についても、一方的な讚美に流れず、実態を客観的に表現しようという努力が読みとれる。ともかく実証史学の立場から見ても水準の高い、行き届いた社史である。

19×25cm 1054ページ，付属資料100ページ（年表73ページ，索引なし），参考文献リストなし，昭和53年11月刊

選評Ⅱ

この会社は，すでに四十年史と六十年史を刊行している。この八十年史は，「経営史的視点に立つてグンゼ八十年のありのままの姿を後世に遺すことを方針として編纂した」（「発刊のことば」），あるいは先の二つの社史を「参考にしながらも，それにこだわらず独自に原資料を発掘し編纂した」（「凡例」）と記されているように，非常に意欲的で優れた社史である。

経営史的視点が強調されているが，たしかに経営の諸領域に対する配慮が行き届いており，また原資料の発掘については，従来からよく知られている波多野鶴吉関係のものに加えて「場長会」（各工場責任者の会議）記録，「遠藤日記」（元社長遠藤三郎兵衛の日記）や「郡是時報」（社内誌）が効果的に本文中にちりばめられており，全体としてバランスのとれた豊かな内容を形づくっている。また，きれいごとだけでなく，能率増進運動（完全運動，緊張週間，機敏運動）の労働者へのしわ寄せとか，従業員教育をめぐる川合信水と大道幸一郎との対立などにも触れられている。

第一級の社史という評価を与えることのできる社史であるが，若干の問題点を指摘するとすれば，第1に財務関係の叙述がやや不足していること，第2に戦前の部分の生き生きとした叙述と比べて戦後のそれがごく平板的なものになっていること，第3に今後はふたたび「人」の問題が重要になると考えられるにもかかわらず，最終章（第八章八十周年を目指して）では，この点についての記述が見出されないことである。

『日揮五十年史』

日揮株式会社社史編纂委員会編

選評 I

エンジニアリング産業の中で、日揮は最も歴史の古い企業であり、同社の社史の刊行によって、この新産業の発展過程を知る材料が一段と豊富になったことをよるこびたい。本史は、一定の時代区分に従って、まず日本経済全体の状況を簡単に解説し、次に主たる市場基盤である石油と石油化学工業の動向をたどり、最後にその中で日揮の活動を説明するというオーソドックスな構成をとり、その記述もゆきとどいている。

このように、本史は力作であるといつて良いと思うのであるが、前記のような構成をとった場合、記述の流れが日本経済→産業動向→企業活動ということになるため、ややもすると、企業の主体的な努力という側面的印象が薄くなる傾向がある。元来、我国の産業社会の風土は、エンジニアリング会社にとっては、決して好都合なものとはいえなかつたと考えられるし、本史でもこれに関連した記述は、各所に散見される。企業史としては、そうした障害をいかにして克服してきたのかというテーマは非常に重要なわけであり、こうした点をも少し前面に押しだした分析があつても良かったのではないだろうか。ただしこの点は、後半の部門編で若干は補正されているともいえよう。

21×28cm600ページ，付属資料39ページ（年表39ページ，索引なし）
参考文献リストあり，昭和54年3月刊

選評Ⅱ

本書は，昭和3年揮発油製造を目的として設立された日揮が，製油事業は挫折したものの，UPO社の特許をてこにプラントエンジニアリング業に展開し，戦後急速な発展をとげて「国際級エンジニアリング会社」としての地位を築くに至る50年の歴史である。

エンジニアリング事業は，技術や施工過程が複雑で専門的であり，関連する分野も広汎である。本書は，このようなむずかしさを克服して，エンジニアリング事業の特性と企業発展の姿が第三者にも理解できるよう，よく整理され，工夫されている。社長の「日揮五十年史刊行に際して」によれば，五十年史刊行の第1の目的は，社外の関係先の方々の御恩顧に深く感謝の意を表したいということであるが，このように第三者を強く意識した作成態度が，優れた本史を生んだものと見られる。理解を助けるために挿入された地図，グラフ，フローチャート，写真等も適切である。戦後の発展期は主要プロジェクトの遂行状況を年代順に追う形となっているが，これも単なる羅列ではなく，プロジェクト規模，技術力，競争力，契約形態，対象業種の変化が，同社の発展の指標となるよう，上手に記述されている。また，この間にあってプロジェクトを消化するための社内体制や経営方針の説明にも，十分な注意が払われている。第Ⅱ編の部門編も，沿革編を補足するようよく工夫されている。希望を述べれば，沿革編の章別は年代順になっているので，題目だけでなくその時期を併記してほしかった。

『創業百年史』

株式会社広島銀行創業百年史編纂事務局編

選評 I

本書の特色は、広島銀行の歴史を広島県の産業、経済との関連でとらえており、とくに、①宇品築港時の同行の役割、②軍都、軍港として発展した広島市、呉市とのかかわり、③大正2年12月の広島金融恐慌時の対応、④県内に設立、開業したすべての銀行について、その沿革、役員の変遷、業績の推移を網羅、⑤県内年表が充実している、ことである。

また、同行は昭和20年8月原爆による大打撃をうけたが、その記録をできるだけ克明に残すよう、とくに力を入れて、原爆時の様子、被災下の営業状況などが詳細に記述されている。読み終えて、もっとも強く印象に残ったのは、この「原爆記録編」である。

本書は、経営にそごを来したとき、業績の悪化、株主総会の紛糾など許容される範囲内で歴史的事実を客観的に述べていることも注目に値する。さらに、明治・大正期の定款、銀行設立時、合併時の資料など原文のまま掲載され、学問的にも価値の高い資料が収録されている。

本書は広島銀行史にとどまらず広島県銀行史、広島県産業経済史である。行員自らの手による年史編纂で、「手づくり」の味を随所に感じさせながらも、しかも、学問的にも高い水準で、調和がとれているといえよう。

21×28cm, 1153ページ, 付属資料337ページ(年表51ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和54年8月刊

選評Ⅱ

本広島銀行百年史は、その数が少なくない地方銀行史のなかでも、一級品に属する出来ばえである。叙述のスタイルは、一県一行主義的地方銀行史の多くがそうであるように、広島県の産業・金融および経済情勢の推移と当行との関係を視角の中心にすえて考察しているが、しばしばその関連の分析が一通りの叙述になりやすい欠陥をある程度克服しており、六十六銀行の主体的活動と広島県の産業金融という客体的経済史的背景とが、入念に叙述されている。広島県金融史としても、その実証的研究の高さと克明な分析力とによって、すぐれた成果をあげている。原爆被害によって資料が消滅したマイナスを考えれば、本書についての努力は高く評価しなければならない。

本書については、感動的な原爆記録をふくめて敬意を払わざるを得ないが、若干の弱点を指摘すれば、以下のとおりであろう。もつとも興味ある箇所の一つである六十六銀行の創業当初の活動の記録が必ずしも十分でないこと、広島県内の諸産業、地方の中小工業の発展過程の考察と分析がものたりないこと、昭和40年代の叙述が他の部分に比較して貧弱であること、表や記述に注記のないものが多く、出典が不明なものが少なくないこと、などである。しかし、これらも全体のボリュームの制約と被爆による資料不足を考えれば、些細な欠点でしかない。

特別賞

『新井清太郎商店九十年史』

株式会社新井清太郎商店編

選評 I

創業者、その後継者、その他それをめぐる多くの人間像を描きながら、達意の文章で、愛情をもって綴られているこの社史には、読者の関心をひきつける不思議な魅力がある。また、従来、日本貿易業経営史ではもっぱら大規模総合商社の経営史に焦点が合わされてきたが「新井清太郎商店」のようなタイプの貿易商の役割も見落されてはならない経営史的テーマであり、本社史は、そうした分野での先駆的業績として高く評価することができる。

ただ、真田、百合根、みかんの輸出を中心に発展した同社も、第2次大戦前すでに豆電球、おもちゃ、ネクタイ、ラジオ受信機、歯ブラシなど多様な商品の輸出に従事しており、同社は一体専門商社なのか総合商社なのかわからない。そうした概念的規定は社史の場合、必ずしも必要ではないが、本社史執筆上の問題意識として、そうした視点がもう少し強く前面に論じ出されていたならば、本書の経営史的意義はより大きなものとなったであろう。

また貿易企業であるからには、外国為替その他貿易決済手段の問題、海運企業、海上保険企業との関係などにも、多くの経営的苦心はあったはずであり、そうした点にも論述が行き届いておれば、貿易企業としての具体像がより鮮明なものになっていたに違いない。

19×23 cm, 661 ページ, 付属資料なし, 参考文献リストなし

昭和54年11月刊

選評Ⅱ

一般にメーカーと比べて商社は資料を残さないといわれ、資料的にみて価値のある商社史は数少ない。当社のばあいもその例外ではなく、あとがきによれば、現社長が書いた約3年間の業務日誌、大正12年以降の決算報告書のほかには、見るべき資料が残されていなかった。本書の執筆者は、この資料の欠落を多数の関係者からの聞き取りと、各地の図書館や資料館での資料収集によって埋めることに成功した。これらの資料に裏付けられながら、時代の背景と当社の動きをからみあわせた記述は、ジャーナリスト出身の執筆者の手になっただけに、「読ませる社史」として出色のものになっている。

また、本書では、主要取扱商品の取引の実態が、それらの仕入先、仕入方法、輸出経路、輸出先、最終用途について刻明に記述されており、この点でも従来の商社史の水準を超えている。

そればかりか、本書は、日本の中小貿易業の通史としても重要な意義を有している。とりわけ、戦前の商品別輸出組合をめぐる中小貿易商と三井物産、三菱商事、あるいは生産者との葛藤、戦時中の貿易統制への対応としての当社の南方での活動の実態、戦後における輸出取引法にもとづく業者間協定の推移等は、この観点からして極めて興味深い。

ただし、社史のオーソドックスな手法という点から、やや注文をつければ、折角大正12年以降の決算報告書が大部分残っているのだから、これらの経営資料をもう少し活用し、できれば巻末資料として、年表とともに掲載して欲しかったし、戦後の部分については、経営者の経営方針や会社の経営管理組織、社員の労働条件等経営的問題についてやや立入って記述して欲しかった。

特別賞

『カゴメ八十年史』

カゴメ八十年史編纂委員会編

選評 I

本書は、トマトソース、トマトケチャップの加工を明治末期から独力で開始し、今日の総合加工食品メーカーの地位を築いたカゴメ株式会社の80年の歴史を、我国におけるトマト栽培や加工の歴史、食生活の洋風化の歴史とからませながら描いた極めてユニークな社史である。その意味でこの社史は、カゴメという一会社のインサイドストーリーに終始することなく、我国における西洋野菜栽培の歴史や食生活にまつわる文化史、農産物加工食品の流通の歴史、農産物加工食品の製造技術史などを豊富にとり入れ、しかも創業者蟹江一太郎の企業家精神と企業者活動、そしてそれによって育まれたカゴメ株式会社及びその前身愛知トマトの組織的な活動と企業体質を極めて生き生きと叙述している。

創業者蟹江一太郎の西洋野菜栽培に始まる農民魂と、これに基礎をおいたトマト栽培に直結したトマトソース加工への挑戦、今日にまで受継がれている近隣農家との契約栽培と加工業を結びつけた垂直的統合の推進、トマトソースの特定問屋を通じる販売方式などが当時の農産物市場や洋風農産物加工食品の流通販売とからませて非常にわかりやすい筆致で描かれている。そして事業が大正末期、昭和に法人化され発展する過程で工場設備の近代化、加工技術の進歩が、アメリカの加工食品業界の技術に明るい関技術顧問の指導で進められた経過が説明され、さらに戦時統制期から終戦後の困難を乗り越えて、新しい段階の大量生産体制を確立するとともに経営の合理化、ジュースその他製品の多角化に進んでいった過程が、体系的に述べられている。

なんといってもこの社史の価値を高めているのは、我国の西洋野菜やトマトの来歴、洋風調味料の伝来を語った前史と、付編の中に日本の加工用トマトの品種改良の歴史やトマト産業の発展を記述するとともに、会社に関するあらゆる記録、生産、業績、資本、製品だけでなく原料収集、広告宣伝、商標ラベル、研究開発から、はては公害対策についてまで、実に詳細なデータや表、そして図表をまとめていることであろう。 — 26 —

21×28cm、632ページ、付属資料226ページ（年表53ページ、索引なし）、参考文献リストなし、昭和53年11月刊

選評Ⅱ

本書は、カゴメの事業創始者蟹江一太郎が西洋野菜の栽培に着眼し、栽培トマトが最初に発芽した明治32年を以て創業の年とし、トマトを中心とする加工食品の分野で、今日の業界トップメーカーとしての地位を築き、公開会社として株式を上場するに至る昭和51年までの80年の歴史である。

本書は、読ませる経営史としては出色のものである。これは創始者が昭和46年まで生存し、既に3種の伝記が市販されており、創始者及びその周辺に対して取材が十分に行なわれていたであろうこと、執筆者に人を得て巧みな面接取材や社内広報誌や手紙等から、時の問題に関する関係者のなまの見解を直接語らせることによって、迫真力のある記述とする努力がなされていることによるものと思われる。

同社は、大正3年には家業から合資会社へと組織を改めているものの、大正8年創始者が農業をやめるまでは、トマト加工業は農家の副業としてであった。農家の鍋釜に類する道具で始められた生産設備や技術が、今日の近代工場に至る過程、原料トマト確保対策—契約栽培の変遷、製品販売対策、トマトジュース事故の発生の失敗の経験をも含めて、そのときどきの経営の基本問題を見失うことなく、豊富な写真と共に年代順に率直で丹念な記述がされている。

A decorative border made of small floral motifs surrounds the central text. The border is composed of a top row, a bottom row, and two vertical side rows, all made of repeating floral patterns.

II. 候 補 作 品 選 評

〔 優 秀 社 史 賞 候 補 〕

〔 特 別 賞 候 補 〕

注) 一の社史につき，お二人の委員の方々から選評をいただきました。

優秀会社史賞候補

『十六銀行百年史』

株式会社十六銀行編

選評 I

本書は岐阜県の産業発展について、かなり細かい記述がなされており、岐阜県経済史でもある。しかし、岐阜県の産業と同行との関係は必ずしも具体的にあきらかでない面もある。

岐阜県の金融史についての叙述は、丹念に調べられ充実しており、立派な岐阜県金融史となっている。

同行自体の経営内容に関する記述は、基本的計表はほぼ全部表に整理されており、利用しやすい。

同行は大正元年8月三井物産手形偽造事件にまき込まれて多大の被害をうけた。さらに、大正9年に名古屋支店に多額の不良債権を生じさせた名古屋事件がおきた。このため第一銀行との合併談が生じたが、自主再建をとることになる。これらの事件は同行にとって不名誉な事件であるが、本書がかなりのページ数をさいていることは評価に値しよう。

総じて全体のバランスがよくとれており、文章もよみやすい。しかも、学界の評価にも十分たえうる地方銀行史であるといえよう。

なお、なぜ一県一行主義が実現できなかったかは興味ある問題であるが、大垣共立との合併談はもう少し詳しく述べて欲しい。

18×26cm, 1007ページ, 付属資料251ページ(年表50ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和53年3月刊

選評Ⅱ

十六銀行百年史は、有力地方銀行史の一つとして、かねてからその編纂が待望されていたものである。内容は、最近の一県一行の地方銀行史の傾向である、当該地方(この場合岐阜県)の産業金融の発展をまずフォローし、ついで十六銀行の沿革を叙述するというアプローチをとっている。

結論から述べると、岐阜県金融史として、まず実証的な研究水準の高さを評価できる。創業期の国立銀行時代の岐阜県の金融情勢と当行の業態および経営内容(とくに岐阜地方における弱小銀行とまだ幼弱だった製糸・織物など諸産業との関係の実態)、大正期における三井物産の手形事件と当行との関係や名古屋事件の詳細、金融恐慌期の対策など興味深い諸問題についての丹念な叙述は、本書を地方銀行史の一つとして、学界への貢献の高いものとしている。

おそらく本書の弱点は次の二つに要約することができよう。第1は、戦後についての記述が戦前と比較して平板なことと、第2は、歴史叙述、とくに経済史、経営史としての文章表現や分析が不統一かつときにははなはだ不正確、幼稚なことである。前者については、多くの銀行史に共通する弱点かもしれないが、後者は、やはり本書の価値を減殺していることは否定できない。銀行史は一般にゆき届いたものが少なくないだけに残念である。

『住友銀行八十年史』

株式会社住友銀行行史編纂委員会編

選評 I

住友銀行の歴史を4世紀前の住友家創業にまで遡って手際よくまとめている。事業の社会経済史的背景も十分整理して書き込まれており、巻末の資料も住友銀行の発展過程を大観するに便利である。ただ、本書が極めて長期の発展を対象としているだけに、個々の時代の経営史像についての掘り下げ方がいまひとつ物足りないものに終わっている。たとえば、明治末までを取扱った第1・2編では、住友経営史の個性とその息吹きを十分読みとることができるが、大正期とくに第1次大戦後を対象とする第3編第2章あたりから、住友銀行の経営政策、特にその政策決定過程についての叙述が次第に手薄になってきており、意識的な経営努力のあとを十分つかみとることができない。

もともと、こうした不満に応えるためには、第2次大戦前後を2部に分けて本書の2倍位の量に編集するか、社会経済史的背景を思い切って圧縮するかしなければならなかったであろう。そのいずれのかたちにもなっていないので、住友銀行経営史としてやや中途半端な感じが残るのはやむをえないことかもしれない。たとえば、住友銀行は他の普通銀行に先駆けて外国業務へ進出した、という注目すべき事実が繰返し強調されているが、そのような発展がどのような構想にもとづいて具体化したのか、またそれがどの程度まで住友銀行の意識的、持続的な経営政策であったのかについて、もう少し掘り下げた叙述があれば、それだけでも本書の内容ははるかに迫力のより大きなものになっていたであろう。また、その支店網政策などについても、同じような見地からのより立ち入った分析がほしかった。

18×26 cm, 794 ページ, 付属資料 107 ページ (年表 34 ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和 54 年 12 月刊

選評 II

『住友銀行八十年史』は、住友銀行が日本屈指の歴史と伝統をもつ大銀行だけに、ひろくその成果が学界からも期待されていた行史の一つである。とくに住友修史室との密接な協力のもとに編纂されたものと伝え聞いていただけに評者自身も多大の関心を持ったものの一つであった。

本行史は、さすがに傑出した大銀行の一つにふさわしく、全体として記述は著しく平明であり、構成も入念な工夫の跡がみられ、住友銀行自体の活動の記述はもとより、金融史的側面の記述においても正確でミスがほとんどない。したがって一言でいって、非常に洗練された銀行史としての印象を受けた。ボリュームのある社史は、通常記述が生硬で読みにくいものが一般であるから、これだけの記述の正確さと平明さとを両立させえたことだけでもすぐれたものといえてよい。

しかし、上述のようなきわめて高い学界からの期待と、銀行史全体について近年急速に向上したレベルからみると、不満がないわけではない。江戸時代の両替業については、すでに学界から知らされている記述以上を出ていないし、本行自体の活動についてみても、肝心の貸付についての立入った内容については十分に記録されていない。明治初年の住友の金融業の変遷、並合業から銀行の設立にいたる経過は、非常に入念かつ興味深く叙述されており、貴重な成果をなしているが、こうした記述が全体を通じてなされていれば、と思わずにはいられない。もともと、そうした立入った記述は、修史室の研究のより一層の進捗ののちに行なわれる方針かもしれない。

『大日本製薬八十年史』

大日本製薬八十年史編集委員会編

選評 I

大日本製薬は、先に六十年史を発行したが、今回八十年史を刊行するにあたって、四つの基本方針を明確に打ち出している。この方針の中に、本社史の特色や長所・短所がよく現われているので、以下、この方針との関連でコメントを加えてみたい。

方針の第1は、「八十年史は60年の歴史を含めて通史とする」ことである。しかし実際には、六十年史は明治、大正期に多くのページが費されているのに対して、八十年史では昭和期の叙述に力点が置かれている。方針の第2は、「最近20年間の最大の事蹟サリドマイド問題は別項として記述」することである。この問題は、まだ最終的な決着がついていないことと、会社の立場で書かれているため掘り下げの浅いものに終わっているが、それでもこの問題を正面から扱おうとした姿勢は評価してよい。方針の第3は、「本文執筆は専門家に委嘱」したことである。この点が、おそらく最大の問題点となったと思われる。つまり、外部のライター（経営史の専門家ではない）に委嘱したため、そつなくまとめはあるものの、叙述が平板で、特色や迫力に欠けたものとなってしまったことである。方針の最後は、「資料編を設け各種資料を記録する」ことである。六十年史にも資料は掲載されているが、それと比べると、今日のほうがはるかに豊富である。とくに「主要学術論文リスト」「学術映画」「当社提供主要放送番組」などは、なかなか興味深い。また小さなことのようにだが「物故役員、従業員氏名」の項で、役員だけでなく一般従業員物故者氏名まで掲載している点は注目される。

18×26cm, 379ページ, 付属資料105ページ(年表24ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和53年5月刊

選評Ⅱ

同社は、さきに『五十年の歩み』および『六十年史』を刊行しているが、本書は60年の歴史を含めた80年の通史として編まれている。しかし記述の重点は最近20年におかれ、全体のほぼ半分の分量がそこに割当てられている。それは、製薬業界の歴史の中でも稀に見る悲惨な被害を生じたサリドマイド問題の被告の座にあった同社が、自らの社史のなかでそれをいかに記述するか、訴訟への対応と劣らぬ関心を持って、社会の注目するところであろう。

本書は、この問題を避けたり簡略にすますことはせず、約20ページをさいて、事件の発端から訴訟の経緯、和解努力と補償、さらに事件の教訓に至るまでを一定の責任意識のもとに述べている。当然のこととはいえ、企業としての社会的責任の自覚が認められる。しかし、これが本史の叙述と分離した別項目になっているため、こうした事件の発生を未然に防ぎ得なかつた経営、薬事行政の体質、また相つぐ薬禍問題を惹起した製薬業界の歴史的、構造的條件は解明されていない。企業がこえるには、高すぎる社史の限界であろうか。

なお全体の構成については、昭和20年代までは、『六十年史』に拠りながら約半分に圧縮し、再編成を試みているが、必ずしも成功していない。要約としては詳しすぎ、代替の記述のメリットにも欠ける。むしろ思い切って前60年分を短くし、30年代以降に叙述の大半をさく方が、本書の今日的価値を高めたように思われる。30年代における大衆薬ブーム下での販売競争、流通系列対策、新薬導入から健保財政赤字、また40年代における大衆薬ブーム終焉と医家向製品への再転換、医薬品行政における規制強化と新薬開発など読者の関心をもつ諸問題の記述が不足していることは、やはり残念というほかない。

『東販三十年史』

東京出版販売創立三十年史編集委員会編

選評 I

戦後、日配が解体され、書籍・雑誌の流通機構の再編成が実施されたが、東販（東京出版販売株式会社）はその時に創立された出版物の販売会社の大手である。

本史は、日配解体・東販創立から筆を起し、戦後30年の出版界の歩み、ベストセラーズ、文庫・新書合戦、全集合戦、雑誌の内容の変化（最近のコミック誌の発展など）を踏まえつつ、流通業界の諸問題について詳細な記述がある。再販売価格維持制度、出版物の正味問題をめぐる出版社・卸売業者・書店三者間の交渉、月賦販売の普及など興味深い問題が、それぞれの歴史的展開のなかでとらえられている。

東販自体の経営戦略も、このような出版物の変化、流通機構の変化と関連させつつ、書店網の掌握、流通事務のコンピュータ化、全国的支店網の形成、営業本部制の採用、販売員や書店のセールス教育、キャンペーン的販売策の採用、長期経営計画の策定など、主要な問題についてやや詳しい記述がある。

本史にあたる「東販30年の歩み」の第3章以降（昭和36年以降）は、同社の5カ年計画の年次区分にあわせて章を分けるという工夫がなされているのも注目される。しかし、それぞれの5カ年計画の具体的な方針・目標・策定意図について、原史料にもとづいた記述がほとんどないのが物足りない。長期経営計画と、個別的な経営施策との関連性が、このために十分には把握しがたいのである。また、財務諸表や販売額（書籍・雑誌・その他の細目に区分したものの）など計数がまったくといってよい程掲げられていない。点数・平均定価・伸長率など部分的な計数が「実績関係資料」としてあげてあるが、これでは全体的な把握がしにくいし、経営計画の成果を評価することもむづかしい。この点は一考を要するところであろう。

19×26 cm, 619 ページ, 付属資料 210 ページ (年表 96 ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和 54 年 12 月刊

選評Ⅱ

会社の誕生のいきさつはよくわかる。

どんな本が, どんな調子で売れてきたか, なにがブームになったか, またそうした変遷の過程で東販は業績をいかに伸ばし, かつ合理化してきたかといったことがよく書けている。しかし, 書籍の流通業界, 特に取次店が果たした役割がいまひとつ鮮明に浮かびあがらない。

日本における本の流通の特殊性の問題は, その本質を“文化の糧”と“商品としての本”との間の相克としてとらえることができよう。この問題を考える場合にこの社史は参考になるであろうか, 疑問である。

『中ノ郷信用組合五十年史』

五十年史編纂委員会編

選評 I

中ノ郷信用組合は、東京都墨田区駒形に本店を置く信用組合で、「中ノ郷」は『新編武蔵風土記稿』にも出てくる墨東地区の名称であるという。同組合は、中ノ郷質庫信用組合として昭和3年6月、賀川豊彦・田川大吉郎・奥堂定蔵・木立義道などによって設立されたが、賀川豊彦らはキリスト教精神にもとづいて関東大震災後の貧困に苦しむ江東地区住民のために設立した江東消費組合につながるものであり、経営の担当にあたった理事等は本所基督教産業青年会に關係ある者であつて、ユニークな信用組合である。

本組合史は、キリスト教精神による設立と経営という独自性を、史料を生かして、生き生きと叙述しており、320ページほどの信用組合史でありながら読みごたえがある。

事業報告書・『協同金融』（組合の機関誌）・庶務日誌などの内部史料のほか、新聞記事なども利用して、経営理念や経営の実態について述べているほか、創立者のプロフィールや座談会も興味深い。質屋を兼営した信用組合は、中ノ郷のほか上田、都城にもあつたが、それらとの経営比較も僅かではあるがなされている。ただし、日本経済や中小企業の動向についての一般的叙述も各章に絞切り型的にみられ、自組合の預金・貸出の構成の計数がないなど不十分なところがある。貸付金の金額別・業種別構成が不明では、特異な経営理念が現実の貸付業務にどのように反映されたのかもわからない。質庫部の計数も、1口あたり貸付金額はどの位であつたのか、借主の職業別構成はどういうものであつたのか、質流れは貸出総額の何%位だつたのか、などを時系列的に知ることができものを掲げて欲しかつた。

19×26cm, 322ページ, 付属資料71ページ(年表38ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和54年3月刊

選評Ⅱ

本書は、キリスト教思想と協同組合主義を指導理念として、東京の下町に生まれた信用組合の50年の歩みを跡づけたものである。全体を通じて、この組合を設立し、その後の経営を指導した賀川豊彦等のキリスト教精神にもとづく隣保共助、協同の思想が満ちあふれ、これが類書にみられない特徴を本書に賦与している。

そして、この指導精神は単なる理念にとどまることなく、この組合の日々の経営的実践の中にも生かされている。当組合は、本所基督教産業青年会の地区改善を目ざしたセトルメント事業と質屋改造運動とが結びついて、設立されたが、何よりもこの設立の経緯が組合の性格を強く規定し、この組合は、昭和20年代まで庶民の金融手段としての質屋業(質部貸付)に大きなウエートをかけていた。また、昭和30年から31年にかけては、他信用組合に先駆け、あるいは時勢に逆行してまでも組合員のために相次いで貸出金利の引下げを強行した。さらに、組合職員との関係では、25年に経営者が「誘導」して労働組合を結成させ、この労働組合に対して経営民主化が保証された。経営者と職員との対等な関係の維持が協同主義の浸透にとって必要だと考えられたからである。また、経営成果の適切な配分も実行され、さらに組合員の協同組合意識を盛り上げるための一種の「教育」手段として、創立以来機関誌「協同金融」も発行されている。

しかし、本書も終章で自ら認めているように、当組合のような経営体には、運動体的側面と事業体的側面の二面があり、一般的には、創立当時のリーダーが去り、自らが経営的に発展するに伴って、事業体的側面が前面に登場してくる。少なくとも、この二面の摩擦が次第に激しくなると考えられる。この摩擦や矛盾に悩みながらも、基本的には運動論理という原点に立ち帰って考えるというような経営方針の決定をめぐるジグザクの過程が描かれたならば、本書の記述はもつと現実感にあふれた魅力を有するものとなったであろう。

優秀会社史賞候補

『西日本鉄道70年史』

西日本鉄道株式会社編

選評 I

社史にもいろいろなパターンがある。創業者の経営理念や企業体質を基軸に企業の歴史を叙述したもの、その企業の属する産業や業界の動向、つまり産業史であるとか、地域経済史との関連で社史をまとめたもの、そして歴史的事実の経過に重点をおいた年代史記録的な社史、といった基本パターンがあるようである。この社史はどちらかというとなら第3の年代史記録的な部類に属する。日本の大手私鉄企業の雄西日本鉄道が、交通運輸という公共性をもった事業を中心に、戦前戦後の荒波を乗り越え、北九州経済圏の相対的地盤沈下と北九州、福岡の都市構造と交通事情の変化した中で、事業内容の合理化近代化をはかり、経営多角化に乗出すまでの歴史的経過がその総括編でたんねんに描かれている。総括編に続く部門編では、西鉄グループ全体の事業内容の全貌が写真や図表などを付けて明らかにされており、回顧編では西鉄発祥の母体九州電気軌道、九州鉄道以来の地方交通と車輛の変遷が写真で表示され、資料編で業績内容や年表が表示されるという構成となっている。その意味では地方交通企業のたどった歴史の年代史的記録としての資料的価値はかなり高いといえる。

ただ難点を言えば、総括編の記述が、年代的記録に忠実なあまり、西鉄がその経営合理化を迫られるに至った背景や内部要因、そういった状況の中で私企業として追求すべき問題点、そしてこの企業が一貫して追求してきたテーマが何であったのかがかならずしも明確になっていないという点がある。たとえば北九州経済の地盤沈下やモータリゼーションによる都市構造、都市及び周辺交通環境の変化をこの会社がどのように理解し、新しい再開発時代の交通産業のあり方や多角化のビジョンをもつに至ったのかといったことが、読者に伝わって来ないのはなぜであろうか。

22×30 cm, 303 ページ, 付属資料 61 ページ (年表 27 ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和 53 年 12 月刊

選評Ⅱ

本書は、バランスのとれた社史である。全体の構成は 20 ページを超えるグラフィックに続いて、Ⅰ総括編、Ⅱ部門編、Ⅲ回顧編、Ⅳ資料編になっており、記述的部分でも写真がふんだんに利用されて、見て楽しい社史となっている。

記述の中心はⅠ、Ⅱであるが、このうち、Ⅰは、九州電気軌道設立以来、前身会社を含めて 70 年に及ぶ当社全体の歴史を 6 期に分けて述べ、Ⅱは、一般自動車、鉄軌道、兼業、関係会社の各部門について、最近 10 年間位を中心としてその歴史を略述している。できるだけ企業活動の全般を視野に入れながら時とともに変化する環境への企業の主体的対応の流れを把握しようという願いがこの構成には込められているように思われる。

そして、実際に、地域社会のダイナミックな変化に対する当社の対応が、経営方針と経営組織を中心として浮きぼりにすることに成功している。事業分野を急速に拡大しつつある西鉄グループの歴史をとにかくも描き切った力量は相当のものである。

ただ、欲をいえば、労使関係についてももう少し立入った記述が欲しかった。本書自身述べているように、昭和 40 年代における労務費の上昇が、運輸事業の合理化と多角化の主要な動機となっているのであるが、それだけに、この過程で、労務費がどのように推移し、労使交渉がどのように行なわれたのか問題のポイントだけでも指摘されておればと惜まれる。また、Ⅳの資料編に貸借対照表等の財務諸表が落ちているのも残念である。

なお、昭和 17 年における西鉄設立以来の当社の営業成績をより立入って知りたい読者のためには、Ⅳで年表とともに代表的経営資料がコンパクトにまとめられている。

優秀会社史賞候補

『二十年の歩み』

株式会社日貿信社史編纂委員会編

選評 I

日貿信はいかなる性格の金融機関か、本書はノン・バンク金融機関で、銀行補完金融機関として規定しているが、その業務内容はなにか、日貿信の資金調達・運用はいかにして行なわれているか、なぜ、このような会社が設立され、いかに発展してきたか、これらがいかに記述されているかが本書の価値をきめる判断基準となろう。

本書はこれらについて記述し、日貿信の性格、特色を浮彫りにしている。日貿信が台湾銀行の第二会社として設立されたことはわかるが、金融制度上いかなる法的根拠にもとづいて設立されたかが本書をよんでもわからない。

19×26 cm, 411 ページ, 付属資料98 ページ(年表50 ページ, 索引9 ページ), 参考文献リストなし, 昭和54年2月刊

選評Ⅱ

本書は、昭和32年に台湾銀行の第二会社として誕生し、貿易関係業務をその目的に掲げていた一金融機関の20年の歴史を述べたものである。

本書の最大の魅力は、その叙述内容の面白さである。朝鮮銀行とともに、戦前期日本の植民地銀行の双璧を成していた台湾銀行の戦後整理を通じて当社(旧称日本貿易信用株式会社)が誕生し、昭和30年代の日本経済の高度成長に伴う慢性的資金逼迫、40年代の現先市場の発展、50年代における現先市場の性格変化に対応して業務内容を変化させて行くプロセスは誠にドラマティックである。本書の面白さは、ひとつにはこのような対象自体の劇的性格によるところが大きい。

しかし、この面白さはそれのみによるものではない。対象とともに叙述方法もこれに大きく貢献している。ほう頭に「ノンバンク金融機関 日貿信」という章を設けて、当社の現時点での業務内容を予め、一般の人々にもわかりやすく解説した点、各時期について、日本経済および中小企業金融の動向という概観部分と当社の業務内容とを有機的に関連させようと努力している点等、ノンバンク金融という極度に専門的な業務内容をできるだけ多くの人々に理解してもらうための「読ませる工夫」にはみるべきものがある。この点、一流の経済ジャーナリストに執筆を委ねた本書編纂の狙いがみごとに達成されているといえる。

ただし、難をいえば、やや資料不足の感を免れ難い。社内資料が、主に社内誌と資金運用・調達に関する一般的業務統計に限られていると推定されるためか、業務内容についての突込みが浅く、とりわけ当社の資金供給先の実態が、たとえば、それがどのていど、あるいはどのような中小企業であるのかほとんど不明である。当社が中小企業金融機関たることを誇る以上、何らかのかたちでこれに迫る努力が必要だったのではないだろうか。

優秀会社史賞候補

『四十年史』

日鉄鉱業株式会社編

選評 I

社内の専門家と関係者の協力によって記述された社史である本書は、戦前における官営製鉄所所属の鉱山部門から昭和14年にいちおう分離独立して以来の40年の歴史を豊富な社内資料を駆使して書かれたものである。戦後在外資産の一切を失ない、かつ親会社日本製鉄の解体に伴う完全分離によって大きな打撃を受けながら、傾斜生産方式と朝鮮動乱ブームで石炭部門を中心に立直りのきっかけをつかみ、さらにエネルギー革命が昭和30年代に入って急激に進行する中で炭鉱合理化を進め、最終的には石炭からの撤退を余儀なくされる過程が描かれ、最後に石炭から撤退後の主たる事業領域となる非金属鉱石部門の戦後における活動と、海外事業の概況が述べられている。戦後の石炭産業をめぐる情勢が四転八転極めてめまぐるしく変化した中で、新鉱山取得や合併を進め、エネルギー革命の下での老朽鉱山の閉山切捨てとビルド鉱有明坑の開発を進めた状況が、国のエネルギー政策や石炭産業合理化政策の転変する中での私企業としてのぎりぎりの限界に対する挑戦として描かれている。ただ記述の仕方がかならずしも一貫したテーマを追う形をとっていないため、平板な描写になっていることは否定できず、石炭部門からの撤退と、非金属鉱石部門や海外事業への進出などの多角化戦略とのつながりが明確でないし、石炭事業で培った鉱山開発の技術の蓄積をこの会社がどのように生かしていったのかということももっと明らかにして欲しかった。最後の会社事業の現況と参考資料(図表・年表)には多くのページをさいていて、特別の配慮がうかがわれる。

19×26cm, 652ページ, 付属資料86ページ(年表48ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和54年11月刊

選評Ⅱ

昭和14年に, 日鉄鉱業が発足したときには, 生産・販売のほぼ8割は, 石炭で占められていた。しかし, 石炭の比重は, 昭和30年代に入って著るしく減少し, 一時的に銅鉱石の割合が増え, 最近では, 石炭は皆無となり, 石灰石を中心とする非金属の諸分野が, 同社の経営を支えている。この間には, 敗戦による巨額の在外資産の喪失など経営の根幹をゆるがせるような困難にも直面している。我国の企業の多くは, この間に大なり小なり良く似た経験をしているとはいえ, これほどの激動の歴史は少ないのであるまいか。

このような一種の予断を持っていたためもあるが, 一読後の印象としては, 記述が余りにたんとんとして強い印象が残らなかった。前記のような観点からいえば, 石炭, 非金属鉱石, 金属鉱石の3部門に経営資源をどのように配分していくかという点についての戦略的意思経営の過程が最も重要な問題となる訳であるが, 本史の昭和20年代後半以降の記述が, この3部門別に分かれているため, これらの3部門にわたる全社的な意思決定過程が鮮明に浮かんでこないうらみがある。この点についての, 企業全体としての判断は, そこここに経営首脳の話の引用という形で一応は説明されているのだが, 重要な問題であるだけに, もう少し詳細な説明と工夫があつて良かったと考える。なお, 巻末の資料は, 良く整理されている。

『日本合成ゴム株式会社二十年史』

日本合成ゴム株式会社二十年史編集委員会編

選評 I

この社史は、社員を対象として作成・配布されたものであるという。社史作成の目的には種々のものがありうるから、こうした限定的な読者を想定した社史があっても良い訳である。特に、本史は、「二十年史」と題されているものの、実質的には「最近十年史」であり、この間の出来事の多くは、まだ余りに新しく、最終的な評価を下しにくいものであると思われるので、一般読者に向かつては、企業としての見解を明らかにしにくいといった事情もあるであろう。しかし、それでは、本史には、中間的なものであれ、思い切った分析や評価が盛り込まれているかという点、必ずしもそうではない。全般的な印象としては、むしろ逆に、企業経営の各局面について、できるだけ広範囲にわたって、事実を記録しておくという執筆態度のほうが目立つ。そして、その限りにおいては、手際良くまとめられている。

ただし、冒頭に述べられているように、「一途の拡大と膨張路線から、急角度の軌道修正を行なった。それがこの10年間であった」としても、一読しただけでは、こうしたイメージは簡単にはつかめない。そのためには、主力製品であるSBRとBRの公称生産能力が、それまでの急テンポの拡大から、一転して昭和46年以降全く伸びていないといった事実を、第29表の中から読者の側で読みとる必要があるのであり、全体的な構成に一考の余地があると思うのである。

18×26 cm, 440 ページ, 付属資料 86 ページ (年表 14 ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和 54 年 2 月刊

選評Ⅱ

冒頭の社長の「二十年史刊行に際して」にあるとおり, 本書作成の主目的は, 役員, 従業員に読ませることを狙ったものであり, 実際にも企業外には特別に配布していないということである。20年史というものの, 既に10年史が刊行されている関係上, 10年史に記述された事項については, その詳細はこれにゆずっているので, 実質は10年史である。

本論は, 1部と2部に分かれ, 第1部「総合合成ゴムメーカーへの道」においては, 第1章「民間企業への脱皮」に始まり, 以下, 生産, 販売を中心とする10年間の企業展開を詳述し, 第9章において波乱の10年の業績の推移を振り返る。

第2部においては, このような企業展開を支えた経営基盤としての経営体制をはじめ, 経営各部門の活動を扱っている。

本書の対象とする期間(昭和42-52年)は, 社史とはいいながら, 時代区分もなく「波乱の10年」と要約されているように, 同社のこれからの長い歴史の中で位置づけも困難な, あまりにも最近の短い期間である。おそらく, このような現状説明に近い社史の累積の上に, 将来本当の社史が編まれることであろう。本書の真の狙いは歴史書をつくることよりも, 史実としての「輝かしい30年史を作り上げるための礎石」を打ち立てたいということにある。したがって, 経営の基本問題に対する経営トップの意志が浸透するよう, また, 経営各部門の活動に対する従業員の理解と協力が得られるよう記述には注意が払われており, やや網羅的なきらいはあるが, この限りにおいて資料の公表にも積極的である。

優秀会社史賞候補

『日本甜菜製糖60年史』

日本甜菜製糖株式会社60周年記念事業実行委員会編

選評 I

読みやすく、結構面白い。土の匂いや、北海道を舞台とするロマンの香りもするし、カラフルな写真は気分よく楽しめる。

豊凶、相場の変動、キューバ危機やオイルショックなどに伴う激動、国際砂糖協定、日豪長期契約などのトピックスもまあまあよく織り込んでいる。

同社は国の保護政策と密接に関連しながら歩んできたのであり、そのことは後半の資料からもうかがえる。ただし、この保護政策は、「農民保護」と「会社保護」の二重性を持っていた。その二重性の意味については、この社史からはよくわからない。この種の社史の限界であろう。

風土的ロマンはあるが、人間くささ(だれが何をしたか)が不足しており、全体としてあつけらかんとしすぎている。

22×28 cm, 368 ページ, 付属資料194 ページ(年表16 ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和54年9月

選評Ⅱ

本書は, 昭和36年7月発行の40年史, 昭和44年6月発行の50年史(簡単な説明と写真)をうけて, その後の資料を整備し, 昭和54年6月11日の創立60周年を記念して刊行されたものである。

同社の社是は, 「開拓者精神を貫き社会に貢献しよう」というものであるが甜菜糖事業については, 同社は開拓者であり, 戦前の業界の歴史は, 大部分同社の歴史であった。ところで, 40年史において業界の歴史と会社の歴史を区分して, 二本立てで記述していたのをあらため, 60年史ではこれを一本化している。このような改善は加えられたものの, 一般的にいつて, 本書は政府助成と介入が複雑に入り組んだ業界の特殊性のためか, これらの外枠の説明はくわしいが, 企業独自の歩みに関する記述は手簿となり, 企業史といった印象を稀薄なものとしているといえる。

企業史といった観点からは, 次のような点についてもっと突込んで記述してほしかった。

①大正10年以降昭和5年まで, 一貫して相当の赤字計上を余儀なくされ, 開拓者として長期苦悩の時が続くが, このような経営の重要問題について記述がない。この間に処する経営者の苦闘のあとを掘おこし後世への教訓をとりまとめるべきではなかったか。

②昭和28年甜菜生産振興臨時措置法の実施後急速に進んだ保護と新規参入, 各種行政介入については, 記述が詳しいが, これが開拓者としての同社の経営の基本姿勢について, 単なる適応の結果だけでなく, 積極的な対応の経緯を説明すべきではなかったか。

『日野自動車販売株式会社 30年史』

日野自動車販売株式会社社史編纂委員会編

選評 I

日野自動車販売株式会社は、昭和23年5月、日野自動車工業（当時、日野産業）の総販売代理店として、日野ディーゼル販売株式会社の名称で創立された。「日野自販の歴史は日野のマーケティングの歴史である」といわれるように、マーケティング中心の社史であるが、他方、日野自動車工業株式会社の本格的な社史が公刊されていないこともあって、自販と密接な関係のある自工のあゆみにもかなりの紙数をさいている。

特長としては、①それぞれの時期における戦略的な車種を中心に、製品計画も含めた広いマーケティング活動が書かれている。②各営業期、各経営計画期のマーケティング戦略を、社内資料により要領よく記述している。③ルノーとの提携、オリエント号の引受け、コンテッサの販売、トヨタとの提携と乗用車販売の廃止など、重要な事件について多面的な記述をしている。④回顧談や他社社史（稿本を含む）なども援用して、読みやすさも追求されているほか、自動車の写真などもふんだんに使って見せる面の工夫もされている。……などが長所といえよう。その反面、ほぼ各県単位に設立されているサブディーラーの販売活動と日野自販の販売戦略との関係は必ずしも十分に書かれていないうらみがあり、社内用語（たとえば「ワンナップ作成」）の多用のためにわかりにくい点もあつた。また、販売品（トラック・バス・ディーゼルエンジン等）の諸元一覧には、かなりの紙数をさきながら、自社の財務諸表はごく簡略化されたものしかのせられていないというアンバランスも目についた。できれば、サブディーラーの小史もつけて欲しかった。とはいえ、ディーゼルトラックを中心とする特異なマーケティング史として水準は高い。

22×28 cm, 562ページ, 付属資料151ページ(年表55ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和53年9月刊

選評Ⅱ

本書は、日野自動車販売株式会社と、これが分離する以前の日野自動車工業の30年にわたる歴史をまとめたものである。前史では戦前の日本自動車工業の生成期における国産自動車企業の消長の中で、日野自動車の前身日野重工が東京自動車工業から分離したいきさつと、戦時中の日野重工の活動が述べられ、本史では日野重工の解散と日野産業→日野自動車への再編以降の歴史と、昭和34年日野自動車販売が発足して以降の日野グループ全体の動向とその中での日野自動車販売の活動を、時代と問題点を追って叙述している。大型トレーラー、トレーラーバスのメーカーまたディーゼルトラックメーカーとして戦後の輸送力回復に貢献した過程から、三井精機製三輪車オリエント号の販売とルノー公団との乗用車生産技術提携によって、大衆市場向け販売の経験を蓄積し、乗用車「コンテッサ」と小型トラック「プリスカ」で全国向け販売ネットワークを確立していった過程、そして昭和41年のトヨタとの業務提携によって、伝統あるディーゼル技術を生かした大型トラックとバス専門のトップメーカーとして業績を拡大していった経過が描かれている。

そういうわけで本書は、前半が日野自動車工業史を中心に、自動車販売問題にどう対処したかを描き、後半は大型トラック、バスの販売拡大に日野自動車販売がどのような努力と合理化を、販売店と一体化して行なったかが述べられるという構成となっている。資料編、年表は組織と財務にかなりウエートを置いており、トラック、バス特殊車輛メーカーとしてのこの会社の歴史的概況はつかみやすい。ただ問題なのは、日野自販の拡販のための努力が、販売促進活動にのみ焦点がおかれ、日野自工に対するマーケティング会社として日野自販の果たした役割、とくにこの面でトヨタとの提携以前と以後にどのような変化があったかが明確にされていないことである。

優秀会社史賞候補

『不二越五十年史』

不二越五十年史編集委員会編

選評 I

この社史は、治工具技術の発展を軸にして編まれた手堅い、良くまとまった社史である。工作機械工業の発展には、必ず治工具技術の発展が伴っており、我々はこの『不二越五十年史』によって、この地味であるが重要な産業の発展について、多くのことを学びうる。たとえば、当初から北陸地方の余剰電力を利用して電気炉による材料から治工具に至る一貫生産体制の確立が構想されていたこと、初期の段階から第一級の研究機関との密接な協力関係があったこと、ユーザーとしての軍工廠や国鉄の占めた地位の重さなど、不二越という企業の発展を考える場合のみでなく、我国の経済発展全体を展望する際にも重要な視点となりうるであろう。また、欄外の注記もきわめて適切であり、技術編における製品の戦前と戦後の比較も平明で良く工夫されている。

しかし、若干の点で、説明が不十分あるいは欠落していることが惜しまれる。前者の例としては、創業者の方針として量産指向ということが強調されているが、その具体的内容の説明が手薄であることが指摘できるし、後者の例としては、価格と原価の面の説明が全くといって良いほど見当らないことがあげられる。価格や原価についての分析がとぼしいのは、我国の社史の通弊のように思われるので強調しておきたい。

21×28cm, 302ページ, 付属資料33ページ(年表12ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和53年11月刊

選評Ⅱ

資料, 年表まで含めた総ページ数302ページは, 社史としては手頃な分量といえよう。資料と年表を除く本文は, 大きく沿革編(全7章, 172ページ)と技術編(全6章, 97ページ)とに分けられている。このことおよび年表の当社事項が「沿革」と「製品・技術」に分かれていることから推察できるとおり, この社史の特色は, 生産技術の発展にいちじるしい比重がかけられていることに求められよう。読者の側の好みは別にして, それなりの見識を示している。

沿革編の文章は, よくこなれていて読みよい。その読みよさを助けているのは, 版組みの工夫である。横組みの体裁をとっているが, 各ページとも本文部分と欄外部分との二列組みとなっており, その欄外部分に必要な資料を掲載することによって, 本文を読みやすくしている。その資料部分は, 社内に関してだけでなく, 必要に応じて各時代の社会的背景が盛り込まれており, また写真も豊富で, たんなる欄外の注といった付録以上の, 重要な役割を果たしている。

本社史の最大の難点は, 技術編の取扱い方にある。そこに力点を置いたことは卓見であるが, その内容は, 素人には読みにくく, 専門家には簡単すぎて, 中途半端なものに終わってしまった。ここに, 沿革編で払われたような何らかの工夫が望まれる。沿革編については, 一応, 経営の各分野について広く触れられているが, 記述が少ないと思われるのは, 従業員の貢献についてである。もちろん, 経営者や労務管理についての項目は多少あるが, 沿革編の中においてさえ, 圧倒的に大きな比重を占めているのは生産技術についてである。それに比べて, その担い手についての叙述が少ないため, 技術が一人歩きしている印象を免がれない。

『松江相互銀行史』

株式会社松江相互銀行行史編纂室編

選評 I

松江相互銀行は、松江市の有力商人・市会議員などが大正4年5月に創立した松江相互無尽株式会社を前身とする、規模のさほど大きくない相互銀行である。同社は、戦時中の無尽会社合併・相互銀行への転換をめぐりぬけてすでに65年に及ぶ歴史をへて来たが、近代工業の発展の遅れた山陰地方に位置しているだけに、経営上の苦難もすくなくなかった。

本社史は、原史料をかなり大量に利用して、無尽会社から相互銀行への転換無尽業務から普通銀行業務への業務の中心の移行・店舗配置政策や社内組織の変化など生き生きした叙述で興味深い。また、小規模であった相銀化直後ごろまでは、機構より人の時代であったことから、経営を担った人々の略歴・行動・理念などがかなり詳しく述べられていて面白い。

とくに無尽から相互銀行へ脱皮し、預金を集めるようになってから、支店・出張所をふやし、諸規則を制定し、機構を整備して、経営の「近代化」が進んだが、その「近代化」の担い手が、県庁の官吏出身役員によって遂行されたところなど、他の銀行史にない面白さがある。しかし、全体として貸借対照表・損益計算書・預金額・掛金額・貸付金内訳などの計数が乏しく、無尽会社時代の貸借対照表などが資料としても収録されていないのは、相互銀行史としても不十分であるといわざるを得ない。戦後の各章は、「日本経済→日本の金融→中小企業金融→山陰経済→山陰の中小企業→自己の歴史」という紋切り型の構成をとっているが、もう少しこのあたりは再考して、「自行の歴史」にウエートをより多くかけたほうがよいし、「創業前史」における無尽の解説も必ずしも必要でないのではないか。

史料がかなり残されているようなので、史料集の刊行を望みたい。

18×26 cm, 695 ページ, 付属資料 244 ページ (年表 76 ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和 54 年 6 月刊

選評Ⅱ

本書の最大の特徴は、経営首脳の人柄、経営理念、経営方針を中心として、無尽会社から相互銀行に至る当行の歴史を記述していることである。そして、あとがきによれば、素人の一執筆者が、試行錯誤を重ねながら 450 ページになんなんとする本文を執筆しており、それだけに、ひとりひとりの経営首脳に対する執筆者の感懐が行間ににじみ出ている。また、このような手法を採ったことからいわば必然的に、所によっては、経営方針をめぐる企業的意思決定の過程にも筆が及んでいる。この意味で、本書は素朴ではあるが、まさに経営史的銀行史になっているといえる。

本書で最も興味深いのは、戦前無尽会社の中でも最小規模でしかなかった当社が、タイムリーに外部から経営幹部を導入することによって、戦後危機を乗り切ったばかりか、相互銀行への転換にも成功し、さらに中小企業金融機関の合併が進む中で「自主独往」の路線を貫いてきたということである。このような当行の歴史は、経済的後進地域における中小金融機関の成長の条件をおのずから浮きぼりにしているといえる。

他方、銀行史として本書をみたばあい、資金の調達・運用の構造がほとんど分析されず、経営成果の分析もほとんどないという重大な欠陥をはらんでいる。資金の流れを追求する努力がほとんどみられないし、財務諸表を利用して当社の経営成果がどのように推移したかを明らかにしようとする志向も弱い。これらについての記述が、上述のような経営首脳に即した経営方針についての記述と有機的に関連づけられていたならば、この社史は銀行史としてもっと読みごたえのあるものになったのではなからうか。

『明治ゴム化成八十年史』

明治ゴム化成社史編纂室編

選評 I

〈『社史』というより「明治，大正，昭和の三代に生きたあるゴム屋の記録」とでも名付ける可きかも知れない〉（「序文」）と書かれているとおり，創業以来80年の同社の歩みが；「人」中心に描写されているところに，本社史の特色がある。その「人」とは，創業者，経営者，あるいは技術や販売の掌に当たった人びとを指しており，それ故に，とかく平板な記述になりがちな技術に関する項目も，生き生きとしている。全体は，本史と資料とから成り立っているが，本史の各章の表題には，歴史をつくる人びと，悲涙，第一場の幕下りる，のように，少しでも読みやすくするための配慮がみられる。

総量が，資料を含めて500ページ弱に押えられていることも，手頃な，標準的な社史となっている所以であろう。また年表において，同社関係，国内ゴム事情，一般情勢に分けられ掲載事項の選択に神経が行き届いていること，索引が付けられていることも，高く評価される。

概評として，力作とはいえないが，難点の少ない，読みやすい社史といえる。強いて問題点を指摘すれば，資料の掲載の方法にもう少し工夫が欲しかった。たとえば，巻末の資料の中に，最近5年間の貸借対照表や損益計算書・利益金処分が掲載されているが，それ以前のこの種の資料は本史の中に随時盛り込まれている。必要に応じて，比較的簡略に本史中にこれらの資料を挿入することは大事なことであるが，本当に資料としてそれらを利用したい人にとっては，このように断片的に掲載されているのは都合が悪い。折角，資料編を設けた以上，そこに時系列的に一貫して載せられていることが望ましい。

18×26cm, 525ページ, 付属資料103ページ(年表62ページ, 索引10ページ), 参考文献リストなし, 昭和55年2月刊

選評Ⅱ

同社の80年は、決して順風をうけたものではなく、むしろ苦難の多い曲折に満ちた歴史であった。「創業の精神と岩崎家及び三菱企業集団との結びつきの由緒」から筆を起した本書は、激動する社会経済情勢の推移のなかで、主体的な性格をもった企業家たちが、いかに当面する諸問題に対処したかという執筆姿勢を、なまなましい筆致で描いて、読者をひきつけるものがある。

岩崎家、磯野計から初代社長米井源治郎に至る前史時代、創業期の技術的苦闘とファーガソンによる技術導入、日露戦争後の好調と破綻、そして新しい工場管理による再建、戦後整理に伴う転落と横浜ゴムとの提携工作の失敗、銀行管理と三菱グループの支援下の再建、キリンビール向けプラスチック通い箱の生産に伴う高成長と50年危機および大整理など、こうした同社の浮沈をかけた局面にたいして本書はときには経営判断の誤りをも摘出し、トップ不在時代の混迷についても詳細に描いている。

こうした本書の特色は同時に、経営陣主体に記述がやや偏り、ためにゴム業界の構造やそこにおける同社の地位、企業としての有機的な構造分析に手薄な印象を与えていることは否めない。また現社長の学友であり、三菱商事時代の同僚という外部執筆者の立場を考慮すると、思い切った過去への評価は、素直な好ましさとともに、別の立場からの検討への期待も残すだろう。また経済史的叙述に不正確な箇所が少なくないのも欠点である。とはいえ、資料による客観的検証にも努力は払われており、さらに労働組合の歩みにも別章を設けるなど、全般的に真摯な編纂態度は高く評価できる。

特別賞候補

『朝日新聞販売百年史』

朝日新聞大阪本社販売百年史編集委員会編

選評 I

新聞経営の3本柱は、編集・広告・販売だといってよいが、これまでの新聞社史はどちらかといえば編集部門中心であった。さいきんになって新聞広告も歴史研究の対象となってきたが、販売についてはわが国特有の宅配制度ともからんで多数の新聞販売店を必要とするためか、詳細な歴史的記述がなされたことはほとんどなかった。

本社史は、その未開拓の分野に筆を入れたものであり、大阪中心という限定はあるにしても、販売部数（府県別）、1カ月紙代、販売制度（規則など）、主要販売店の動向、など基本的な流れが知られるうえ、それぞれの時代のトピックも興味深く描かれている。社会的事件（たとえば戦争）が販売部数に影響したこと、「大新聞」から「小新聞」へ新聞界の主流が移ったこと、新聞社間の販売競争、第2次大戦後の巨大販売店（神戸の兎島、大阪の北尾、京都の太田、これを「御三家」と呼んだ）の解体と販売網の再編成など、重要事件には相当のページ数をさいて述べられており興味深かった。

しかし、史料上の制約によるのか、時代的に精粗の差があり、販売史よりも経営全体の史的記述が多いところもあって残念である。昭和以降（とくに戦後）は、販売史以外の記述が寄せ集め的になされていて興味をそぐ。序文に「店主・従業員の方々の記述も割愛せざるを得なかった」とあるが、さいきんの販売現場のなまなましいエピソードなど欲しかった。

東京編；西部編などの続刊を期待したい。

15×21cm；647ページ，付属資料36ページ（年表27ページ；索引なし），参考文献リストなし，昭和54年5月刊

選評Ⅱ

新聞社の歴史を「販売」と「大阪発行」にそくしてまとめた100年史であり，その点だけでもユニークだが，材料は硬軟両様のネタをふんだんに集め，これを駆使して面白くまとめてあり，「ジャーナリズム裏面史」「商品としての新聞史」たるに値する。

組立て方，書き方もよい。新聞業界全体の栄枯盛衰もよくわかる。販売店主から配達の従業員もこれを読んで面白いとおもうにちがいない。

欲をいえば，末端における拡販の努力などもっと書き込んでほしかったし，また，最近の10年ないし，十数年分くらいの盛り上がり不足している。

『大阪魚市場株式会社三十年史』

大阪魚市場株式会社社史編纂委員会編

選評 I

本書は、鮮魚取引の長い伝統と日本一の取引高を誇ってきた大阪の鮮魚卸売市場の流れをくみ、戦時中の魚類統制会社を再編成して出発した大阪魚市場株式会社の30年史を綴ったものである。とくに昭和6年に大阪中央卸売市場が開設せられて以来、鮮魚類、塩干魚類の集荷、卸売の取引機構が社会情勢の変化に伴ってどのような問題を抱えて来たかということ、鮮魚流通問題への政府、自治体の政策的介入及び指導のもとで、中央卸売市場→大阪魚株式会社→大阪魚類統制株式会社→その分割会社としての大阪魚市場株式会社30年の歴史を通じて明らかにしてきている。この会社の場合その歴史的事情が示すように、自由経済機構の中で、中央卸売市場法あるいは卸売市場法といった法的制約と公共政策の指導に従い、伝統性の強い仲買制度と取引慣習を引継ぎつつ私企業としての「商権の維持発展」と「公共使命の達成」という二つの目標を達成せねばならなかった。したがって本書では、戦後における水産物流通行政の展開と水産物の生産、流通、消費構造の変化をたどりつつ、中央卸売業という特異な業界にあって経営の近代化と業務の合理化を進めて私企業としての対応をどのようにはかってきたかが克明に時代を追って記されている。

ただ難点をあげれば、組織の改革、業務の改善、取引制度や卸売業務の改善についてかなりくわしい記述があるにかかわらず、企業的対応の記録に止まり、この会社の活動が、いろいろ問題の多い水産物の流通機構や価格形成の上でどのような影響力をもったのか、とくに、単複問題という形でつねに登場する卸売機構の集約化のメリットと、水産物取引における自由経済のもとでのマーケットメカニズムの関係はどうなるかについての突込んだ分析が不足している。

15×21cm, 451ページ, 付属資料34ページ(年表20ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和53年3月刊

選評Ⅱ

本社は鮮魚、水産加工品の卸売会社であり、非常に特殊な業態をもっている。そこで社史には、まずこの業態を正しく理解させるための工夫が成功しているかどうかの評価の上の大きなポイントとなろう。残念ながら、この点で独善性がめだち、流通機構の複雑な仕組みを本書から読みとることはかなり困難である。とくに戦前期の単一卸売会社時代は、公営の中央卸売市場と大阪魚株式会社との関係を理解するのがやっとで、雑喉場時代からの問屋と魚株式会社との関係(単なる株主ないし役員としての関係ではなく、業務上の関係)についてはほとんど理解不能であった。

戦後、統制会社が解体されて卸売会社複数制がとられていく頃になると、これらの関係はかなり明瞭になってくる。しかし、株式会社としての経営面の記述は乏しく、大幅人員整理や高度成長の一連の業務改革の効果について、その裏付けもやや弱い。このことによってマージン引上げ問題も表面的な理解に流れてしまったといえる。しかし、これらの欠点を含むにもかかわらず、時代の流れと会社の発展過程は全体としてよく整理されて興味深く捉えられており、そうしたなかで人的系譜が生き生きと描かれている。

なお、目次によれば梅原竜三郎画「魚」が口絵に入っているはずであるが、この絵が欠けているのはいかなる手違いであろうか。

特別賞候補

『太田胃散百年の回想』

株式会社太田胃散社史編集委員会編

選評 I

本書は、明治12年官許を得て発足した家業としての太田胃散の100年の「胃散ひとすじの道」を記したものである。同社は大正9年には株式会社となっているが、それまでは個人企業であり、また太平洋戦争後は日本経済の高度成長の波に乗って大きな発展をとげるが、現在においても太田家の家業であることに変わりはない。

本書の構成は、序章「高級官吏から商人の世界へ」、第1章「維新の嵐の中で」の創業者の前史的な活動の記述から年代順に、第2章「太田胃散百年史の開幕」を経て、第7章「新しい躍進をめざして」、終章「未来への旅立ち」へと続くが、家業としての性格上、記述の重点は、事業の発展に対するこの間4代にわたる主人—社長の貢献を明らかにすることにおかれている。とくに終章においては、歴代社長の性格や功罪を要約的に回想して、「未来への旅立ち」の指針としているが、これは本社史全体を貫く方法となっている。これによって本書は非常にまとまりのよい、興味をもって通読できるものとなっている。ただ残念なことに；あとがきにもあるとおり、震災と戦火によって経営内部資料のほとんどを消失していた関係上、傍証に依存せざるを得なかった点も多いようである。書名が「百年の回想」となったのも、このためではないかと推測される。

13×18cm, 276ページ, 付属資料14ページ(年表13ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和54年6月刊

選評Ⅱ

四六版276ページのハンディな本書は, 社長太田一族を中心とした「家業四代記」として, ノンフィクション小説の面白さをもつ異色な社史である。

地方小藩(下野国壬生藩)の武士の子に生まれた創業者太田信義が, 幕末の乱世にあって天狗党に加担して投獄されたり, 脱藩して上京し吉原でロウソクの行商人になったり, 上野の山に立てこもった彰義隊討伐のため西郷隆盛に助力するなど波瀾に富んだ生活を送った末, 地方庁の官吏から商人に転向して売薬業者として成功するまでの経緯は, これまで明らかにされることの少なかった東都の新商人の形成過程としてきわめて興味深い。その後, 2代目, 3代目の努力で, 多くの困難に遭遇しながらも, 着実に家業経営を発展させ, やがて法人経営へと転換して行く経過もまた, 豊富なエピソードに色どられて, 生々と描かれていく。第2次大戦後, 4代目の時代になって, なお色濃く残っていた家業経営の方針に対して, 「青天のへきれき」ともいえる労働組合の結成, その上部団体(全化同盟=同盟系)への加入による家族的労使間の止揚, それと相前後する生産における機械化・省力化の徹底, そして牛久への新工場の建設など, 家業経営から近代経営への発展的脱皮の歴史は, 多かれ少なかれ家業経営的色彩をもつわが国の中小企業にとって, その発展のためのすぐれた教科書となっている。

この種の社史としては, まったく出色の社史であるが, あえて難点を求めれば, 時代背景についての叙述が, やや冗漫で全体のバランスを失していることであろうか。

『資生堂宣伝史 I 歴史, II 現代, III 花椿抄』

株式会社資生堂編

選評 I

本書は、全3巻よりなり、第1巻歴史では、銀座の薬局からスタートした福原資生堂の2代目経営者で芸術的センスの持主だった福原信三によって資生堂化粧品部が設立され、さらに大正に入って資生堂意匠部が活動を開始して、資生堂デザインが確立していった過程を描き、さらに戦時中の受難期を経て、戦後における資生堂宣伝部の活動を、意匠デザインの変遷を中心に商品広告とパブリシティの歴史を関連づけて記述している。第2巻現代は現代において多彩化し多様化した資生堂デザインの姿を図集で紹介し、第3巻花椿抄では、戦前からの伝統をもつ対消費者PR誌花椿の目立った特徴的な記事を時代を追って編集している。第2巻は、資生堂デザインの現代像を十分に理解させてくれるし、第3巻は資生堂そのものの歴史というよりも、風俗史文化史の香り高い記事や軽いタッチのエッセイの類にも一種のミニコミ文芸史的な記事も多く見られ、企業パブリシティの生きた標本を見せられる思いがする。第1巻歴史においても豊富な図解を載せて広告コピーやデザインの発達が商標やラベル、包装等にどのように反映されて来たか、明治、大正、昭和を通ずる婦人雑誌、新聞などの媒体広告を資生堂がどのように活用して来たかがいながらにしてわかる編集となっている。

資生堂はつねに外注によらず、社内で金をかけ智恵をしぼって独自の広告デザインを発達させて来たが、企業としての流行、服飾文化に対する自己主張をその中に反映させて来ている。本書はそのような資生堂デザインの一代記であるとともに我国における広告デザイン文化史の貴重な資料たりうる価値高いものといえよう。

ただ本書は、デザイン史、宣伝史としての価値は高いが、社史としての記述には多くの難点がある。人物の消息なども含めて叙述に一貫性が欠けていること、および資生堂デザインの一貫した基本理念が何であったかをかならずしも明確にしていないことがそれである。

21×28cm, I 245 ページ, II 230 ページ, III 190 ページ, 参考文献
リストなし, 昭和54年7月刊

選評Ⅱ

資生堂では『八十年史』『百年史』と出版してきており、今回の企画は社史では十分にカバーしきれなかった側面を部門史にまとめたものである。薬局であった資生堂が化粧品へ本格的進出をするにあたって、商品デザイン広告宣伝には当初から密接な関係にあった。この両者を結びつけてそこへ全力を注ぎ、今日の資生堂の基礎をきずいた福原信三の経歴と活動がとうぜん叙述の中心となっている。

彼自身写真家として名をなした福原は、アール・ヌーボー風デザインを一貫して採り入れ、独自のデザインを確立し、明治・大正時代に企業規模で格段の差のあった、「クラブ」「レート」などに宣伝広告面からおいつき、おいこしたのである。本書「Ⅰ歴史」ではこうした資生堂のマーケティング、とくに広告を克明に描き出したユニークな文献である。福原を軸に交錯する多くの画家やデザイナーをとりあげ、その作品も紹介しているので読んでいて楽しいし、さらにこの業界における広告や商品デザインの重要性もよく理解できる。ふんだんに写真が使われていて視覚的にも興味深い。もっとも本文の記述と写真がずれていて、デザインの細かな変化をたしかめにくい箇所があるばかりでなく、歴史叙述としては肝心のマーケティングの活動を略しているので、社史を讀んでいないとよく判らない箇所が少なくないのは、難点といわねばならない。

「Ⅱ現代」では写真とともに年表、座談会を収録しているが、誤植が多い。

「Ⅲ花椿抄」は部分復刻であり世相史として興味深い。

『社史 I 新明和工業株式会社』

新明和工業株式会社編

選評 I

この社史は、前史の最終章として記述されている終戦後の数年間も含めて、戦後史として読むのが適当であるように思われる。その場合、重要な論点は、もちろん一応は触れられている訳であるが、敗戦に伴い「川西社ハ本来ノ営業目的ヲ失ヒタルモ、当面従業員ノ生活維持ノタメ転換事業ヲ行フ」ということで開始され、やがて特装車やポンプ等々の事業分野となっていく新規事業の消長は非常に複雑で、社外の者にとっては、一読しただけではその全体的脈絡をつかむことが難しい。このあたりには、たとえば一覧性のある系統図の作成などの工夫があってもよかったのではなかろうか。

また、戦後の同社にとって最大の事件であった川西社長の死後の経営体制と、日立グループへの参加の経緯については、この社史の説明だけでは説明不足の感じがする。これは一つには、新明和という企業における川西社長の存在の意味が、社外の者には想像できない程に大きかったためとも考えられるのだが、一つには日立との交渉過程について、より詳細で明快な説明が必要のためといえよう。この部分は、まず新明和にとって航空機事業に理解のある相手である必要性が強調され、次いで、日立側の中間的判断として、航空機事業の将来性は買うが当面の新明和の航空機事業計画には資金的援助が難しいとの見解が示されたことが書かれており、以降の過程が相当省略されて、いきなり日立傘下に加わることになったという説明は不十分であろう。

16×21cm, 465ページ, 付属資料48ページ(年表43ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和54年10月刊

選評Ⅱ

本書は、戦前の航空機工業史に貴重な足跡を残した川西航空機と、戦後同社の第二会社として設立された新明和興(工)業の歴史を、いわばテーマ別・部門別に記述したものである。全体を二部に分け、川西航空機を対象とした「前史」はほぼ時代を追ってテーマ別に、新明和興(工)業を扱った「新明和工業株式会社二十五年の歩み」は主として部門別に記述している。

本書の第1の特徴は、特に戦後は部門史の集合であり、各分野の専門家によって記述されたらしく、戦時中の航空機や同エンジンの製造技術が、戦後、ダンプカー、オートバイ、ポンプ、各種プラント機器等多様な分野に生かされてくる過程が生き生きと描かれていることである。多角的機械メーカーの場合、こうした部門史、製品史を社史の一環に組込むことが不可欠であることを示している。

第2に、経営者の経営理念や方針を具体的な事業展開と関連づけて記述していることも本書の優れた点である。第6,7章の、日立系列に入る過程や伊藤新社長の経営方針に関する記述、第17章の、川西清兵衛、同竜三郎社長や伊藤社長の経営理念・方針についての記述は、同社の伝統とその新環境下での変容を率直に表現していて興味深い。

しかし第1の特徴は反面で、特に戦後の場合、各時期の会社としてのトータルイメージを把握しにくくしている。旧航空機メーカーが、戦後、多額の戦時補償債権を切捨てた後、いかなる方針に指導され、いかなる製品を選択することによって多角的機械メーカーなり、自動車メーカーとして再生し得たのかという問いかけに答えるためには、たとえば戦後復興期、高度成長期第一期(30年代)、同第二期(石油ショックまで)、低成長期に区分し、各期の方針や製品構成を概観する必要がある。まず総論でのこうした概観の上で、本書のような各論を展開すれば、同社の歩みがより鮮やかに伝わってきたのではないか。

特別賞候補

『東京海上の100年』

東京海上火災保険株式会社編

選評 1

大部な本格的社史を基礎に読みやすい手頃な大きさの社史を編集し、社内外の多くの読者にとにかく一人でも多く読ませようという努力は、最近多くの企業によって試みられているが、本書はそうした社史として良くできている。保険という地味なサービスを売る事業について読者の興味をつなぐため、シェクスピアやモーパッサンまで動員する一方で、日本の海上保険業における「東京マリン」の主導的活躍、その火災保険や自動車、航空保険への多角化の過程を、欧米損害保険事業の発展にもふれながら、首尾よくまとめている。また各務、平生など戦前の東京海上のリーダーたちの苦闘や第2次大戦後の人材養成計画など、この事業における人の問題にも筆が及んでいる。

東京海上火災は現在全2巻の本格的社史を編集中であり、その執筆者たちの協力やそのため整備された資料が本書の誕生に貢献したものと思われるが、それにしても本書は、地味な損害保険企業の社史を面白く読ませる点で見事に成功している。欲を言えば、内外保険市場における需給関係、船齢と保険料率との関係など経済学的な考察をもう少し取り入れてほしかった。それがあれば、専門家筋にとっても読み応えのある社史になったであろう。

13×19cm, 372 ページ, 付属資料40 ページ (年表27 ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和54年8月刊

選評Ⅱ

保険会社がなぜ設立され, どのような事情で日本に導入され, いかに発展してきたか, そのなかで東京海上がいかなる役割をはたし, 今日の地位を築いてきたか。これがわかりやすくかかっているかが本書の価値をきめる判断基準になろう。

本書は執筆者に人をえてわかりやすくかかれており, 三菱の資本参加, 各務の苦心等も記述され, 東京海上が日本に損害保険を初めて導入し, 業界の先頭に立って保険の普及, 発展につとめてきたことが生々しく描かれており, ハンディで読物としてのおもしろさはある。

特別賞候補

『東京帽子八十五年史』

平野 力編

選評 I

本社史は、日本における洋風帽子、とくに中折帽子の盛衰と運命をともにした老舗「東京ハット」の社史であり、第二次大戦後、ネクタイ、マフラー、スポーツシャツなど洋品部門、ヘルメットなど樹脂部品、さらにはサインペンやマーケティングペンのペン先などに経営多角化して存続して来た当社の苦闘のあとも明らかにされている。戦前の帽子市場のあり方が帽子のファッションの変化とともに興味深く描かれており、またそれに伴う同社のマーケティング活動の変化についても詳述されている。

ただ、全体として、本書の叙述は編年史的手法に寄りかかりすぎており、経営問題ごとの分析的叙述が十分でない。90年近い歴史と伝統をもった企業であるから、発展の各時期の経営上の中心問題について、重点的に整理した叙述になっておれば、より読みやすく、楽しく、かつ迫力のある社史になっていたであろうことが惜まれる。

15×22cm, 363 ページ, 付属資料120 ページ (年表13 ページ, 索引なし), 参考文献リストあり, 昭和53年11月刊

選評Ⅱ

文明開化の象徴の一つである帽子を国産化する意図の下に, 渋沢栄一, 益田孝らによって設立されたのが東京帽子である。同社に先立って, 明治22年に日本帽子が開業しているが, わが国で本格的な帽子製造が行なわれるようになったのは, 日本帽子を継承して25年に発足した東京帽子以後である。同社は, 最初から株式会社の経営形態を採っていたこと, また生産技術はアメリカ人, イギリス人技術者・職工に頼っていたことからみて, すぐれて「近代的」な企業として出発した。以来, 85年にわたってその伝統を受け継ぎ, 大企業に成長することはなかったが, 堅実な中堅企業としての歩みを続けてきたことは, 浮沈の多い中小企業にとって, 一つの模範を示している。

この社史は, A5判, 年表や「あとがき」まで含めて363ページの量であるが, 中規模企業の社史としては, 本格的な社史といえよう。本文は, 時代順に, 創立前史, 明治時代, 大正・昭和(戦前)時代, 昭和(戦後)時代の各章から構成されており, それに管理・資料の章が加えられている。叙述の内容は, 産業史, 業界史, それに風俗史が豊富に織り込まれていて興味深い。むしろ, 昭和(戦後)時代以外は, 資料の不足によると思われるが, 肝心の同社経営史の記述に乏しく, 業界史, ないし風俗史の性格が強すぎる嫌いがある。昭和(戦後)時代の叙述になってようやく経営史らしい体裁をととのえてくる。最近の需要の変化に伴い, 経営の多角化が指向されているが, その将来は大いに注目すべきである。

特別賞候補

『大衆とともに25年〈沿革史〉』

日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編

選評 I

テレビ放送事業は、その製品である番組も、原料である取材、制作のソースも無限の多様性をもっており、また番組と社会との相互影響関係も複雑である。しかも、本書が対象とする25年は、世界的にもテレビ事業の創業期にあたり、放送技術について、激しい技術革新が連続している。

このような特性を有するテレビ事業の経営史をどのような視点から記述するかは大変むずかしい問題であろう。本書では、ジャーナリスティックな手法で丹念な史実の積上げが行なわれており、この方法によって、創業者正力松太郎の先見性と実行力によって、「新しい歴史のとびらを開く」ものとして、テレビ予備免許第1号を獲得して創業に至る過程は迫真力のある記述となっている。しかし反面この手法は、創業期以後業態の多様化が進むにつれ、焦点がぼやけ、事実の羅列にすぎないとみられる記述が多くなり、また標題見出しと一致しない記述事項も見られるようになり、読ませる経営史としては、いささか物足りない感がある。本書によって材料は十分に揃ったのであるから、より視点の整理された新しい企画を望みたい。

なお書名『大衆とともに25年』が示す如く本書で最も重きをおいているのは、番組の変遷であると見られ、本文284ページ中、最も多くの紙面をとる一方、資料編「放送番組の移り変わり」に100ページ、別冊写真集に167ページをあてているが、より印象的にして読者に読ませるためには、これらを一体化した別冊を企画するのも一案ではないかと考えられる。

21×26cm, 551ページ, 付属資料267ページ(年表32ページ, 索引なし), 別冊写真集169ページ, 参考文献リストあり, 昭和53年8月刊

選評Ⅱ

周知のようにアメリカを除く諸外国においては、放送事業は官公営であるが、日本ではNHKと並んで民間企業によって行なわれている。このことは日本テレビ放送網の創立者でもある正力松太郎らの努力によるものであった。本書の第1章では、戦後の占領下でテレビ放送の創設に着目した正力松太郎が、放送事業の官営独占に反対して、第1号テレビ局の免許を受けるまでの経緯——とりわけNHKとのあつれきについて叙述している。

ついで本書では、彼の強力なリーダーシップによって、草創期のテレビジョンのハードウェアの技術はもとより、番組の制作から販売、ネットワークの整備など、開拓者の苦勞ではあるが活気に満ちた活動が比較的好く描かれている。この部分で、一般に出版やマスコミ関係の社史ではネグレクトされがちな経営の問題も書かれている点は評価できる。しかし、創業期をすぎた時期については、昭和45～50年の経営政策の転換について、いちおう記述されているとはいえ、概して番組中心の平板な記録が多くのページを占めており、この業種の他の企業と同様に工夫が足りないことは否定できない。さらに本書は半分近いページ数を「部門・資料編」としており、年表はじめ諸資料を収録しているが、決算関係の資料がはいっていないのも弱点である。

特別賞候補

『日本リース十五年史』

株式会社日本リース編

選評 I

手軽にかつ器用にまとめてあり、ハンドブックならこれでもいいであろう。

それにしても「リース」という、既存の概念にはない新しい業種が出現した
いわれをもっと書いてもらわないと面白くない。

リース業が誕生し、さらに発展する過程で、リースの概念自身に変化し、発
展していったのではないか。そうしたダイナミズムがこの本からはうかがえな
い。15年という会社の若さにもよるであろうが。

13×21cm, 206ページ, 付属資料73ページ(年表18ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和54年6月刊

選評Ⅱ

日本リースは、昭和30年代末に発足したリース業界の先発3社の中でも、最先発の企業である。従って、この十五年史が、「当社の歴史は……, リース産業の黎明期を明らかにする貴重な歴史であるという側面もあり、史実を明らかにしておく必要性も高いとの判断から、社内外の方々に広く読んでもらえる内容」とする方針で書かれているのも、十分な理由があつてのことである。そして、市村清という創業者の個性もリース産業の急成長も共に、物語性に富んでいるため、大変に読みやすい社史ができあがつたといふことができる。その意味で、前記の方針は相当程度成功裡に実現している。

しかし、「読みやすさ」の点で優れていることと「読み応え」の点で優れていることとを両立させるのは非常に困難であり、この十五年史の場合も、後者の点では少し物足りない感じがある。たとえば、新しい商習慣が定着する過程では、税務問題は避けて通れない。従って、本書でもかなりのページをこれに当てているのだが、法人税通達第五次原案が、「リース会社の存立基盤そのものを揺がしかねない」ものであつたといふ一般的な説明はあるものの、その具体的な内容やリース会社の経営活動との関連で何が問題であつたのかはほとんど説明されていない。このようなことから全体としては良くまとまっているものの、やや物足りなさを感じるのである。

『マンダム五十年史』

株式会社マンダム編

選評 I

マンダム株式会社の発端は、営業不振となった大崎組の事業を再建するため金鶴香水株式会社が昭和2年12月13日に設立されたことにあり、本社史はこれを起点とした50年史である。昭和7年10月に西村新八郎が金鶴香水株式会社を再建するために引継ぎ、ここで資本系統も一変し、翌年、丹頂チックを発売、昭和10年前後には正価販売推進、小売店を直接掌握するための「丹頂ベルトライン制度」の実施・理髪店を加盟店とする「丹頂チック推奨店」の設置など、積極的な販売政策をとる。戦中は軍需品でないことから圧迫を受け、戦災にもあって、経営の危機が訪れる。戦後は、昭和30年より男性用化粧品を専門化し、昭和46年には社名をマンダム株式会社へ改め、ヤング層をターゲットとする戦略をとる。

化粧品業界には資生堂・カネボウなど、いわゆる制度品メーカーと、マンダムのようない部品目に専門化しているメーカーとがあるが、本社史は制度品メーカーでない会社の社史として、販売戦略を詳述しており興味深い。とくに、パッケージやCFの歴史的変遷は宣伝・広告の歴史としても読めるし、販売店の系列化も市場の変化とからませて書いてあって面白い。しかし、貸借対照表、製品売上げ高内訳、広告費などの推移がほとんど示されていないのは残念である。業界誌なども資料として、販売方針、シェアの推移、業界の動きなどをビビッドに画いているだけに、数字的裏付けが欲しいのである。

19×24cm, 425ページ, 付属資料35ページ(年表15ページ, 索引なし), 参考文献リストなし, 昭和53年4月刊

選評Ⅱ

株式会社マンダムは、「金鶴香水」で大正時代から知られていた大阪の舶来輸入雑貨商大崎組の業務を継承し、昭和2年に設立された金鶴株式会社の後身である。まもなく「丹頂チック」を発売して会社の基礎を築き、昭和46年現社名となった。

本社史は広告や販売に重点を置いて記述されているところに特色がある。とくに戦前の部分には業界史、風俗史としての面白さもある。戦後、しばしば同業他社に追い上げられたが、40年代に「マンダム」の売り出しで盛り返し、このマーケティングを展開して全国的な直販営業網をつくりあげる過程が興味深い。同社はいわゆる制度品メーカーに対し、一般自由品メーカーであり、この業界ではしばしばおこる乱売への対応には苦勞してきたのであったが、こうした過程を経営的にとらえるには記述が簡単すぎ、いつ、どのようにということも順々に並べる記述方法をとっているために、一読しただけでは主体的対応と諸問題がつかみにくいという難点がある。マーケティング史だけに弱点といわねばならない。巻末に創業者(現社長の父)の小伝がある。決算や売上高などの数字は資料として付されていない。

委員会事務局 財団法人 日本経営史研究所

〒102 千代田区平河町2-16-15(北野アームス)

☎262-1090・265-2371(内 254・361)

禁・無断転載